

保



戀をある人



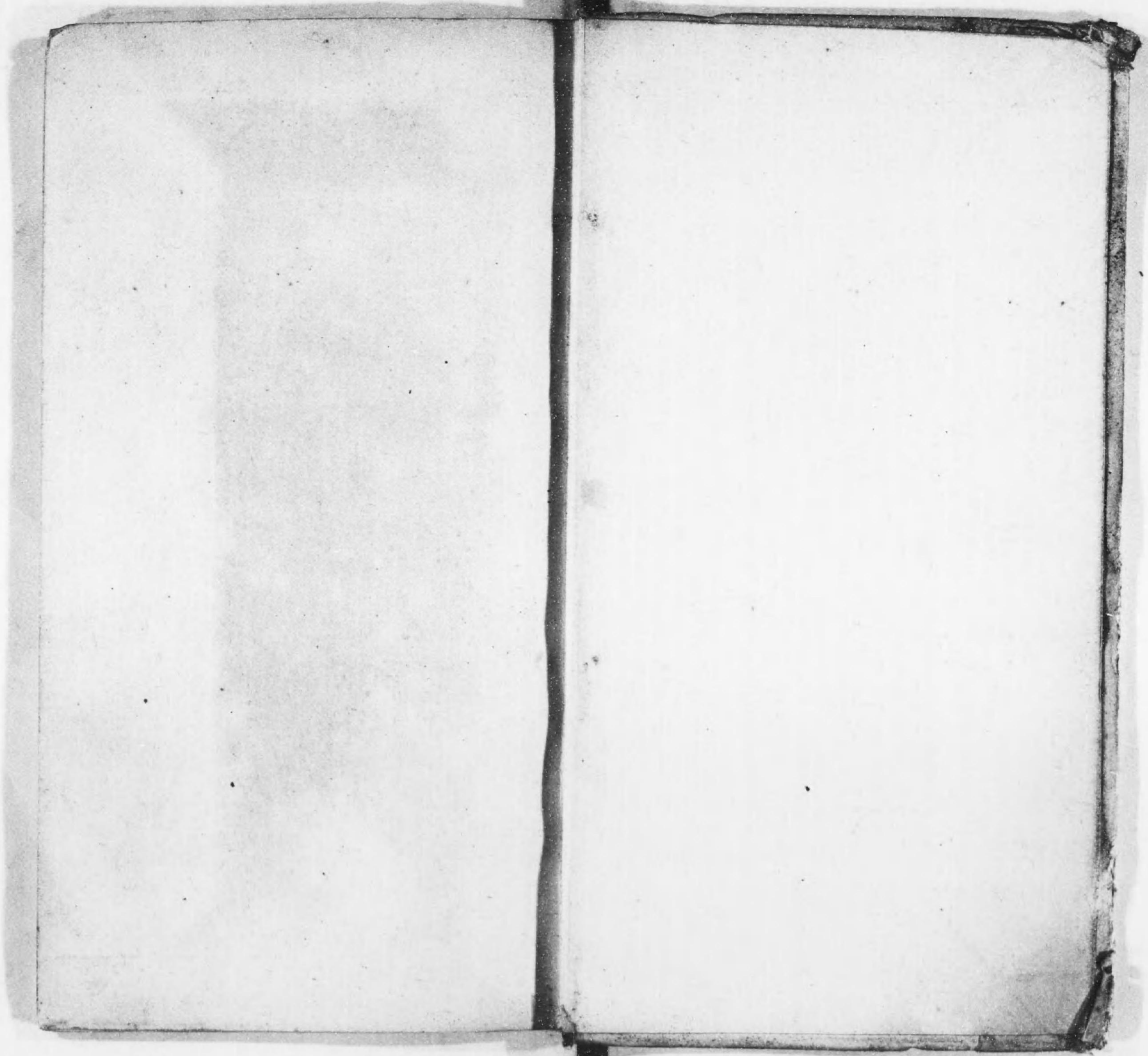
版藏社代現



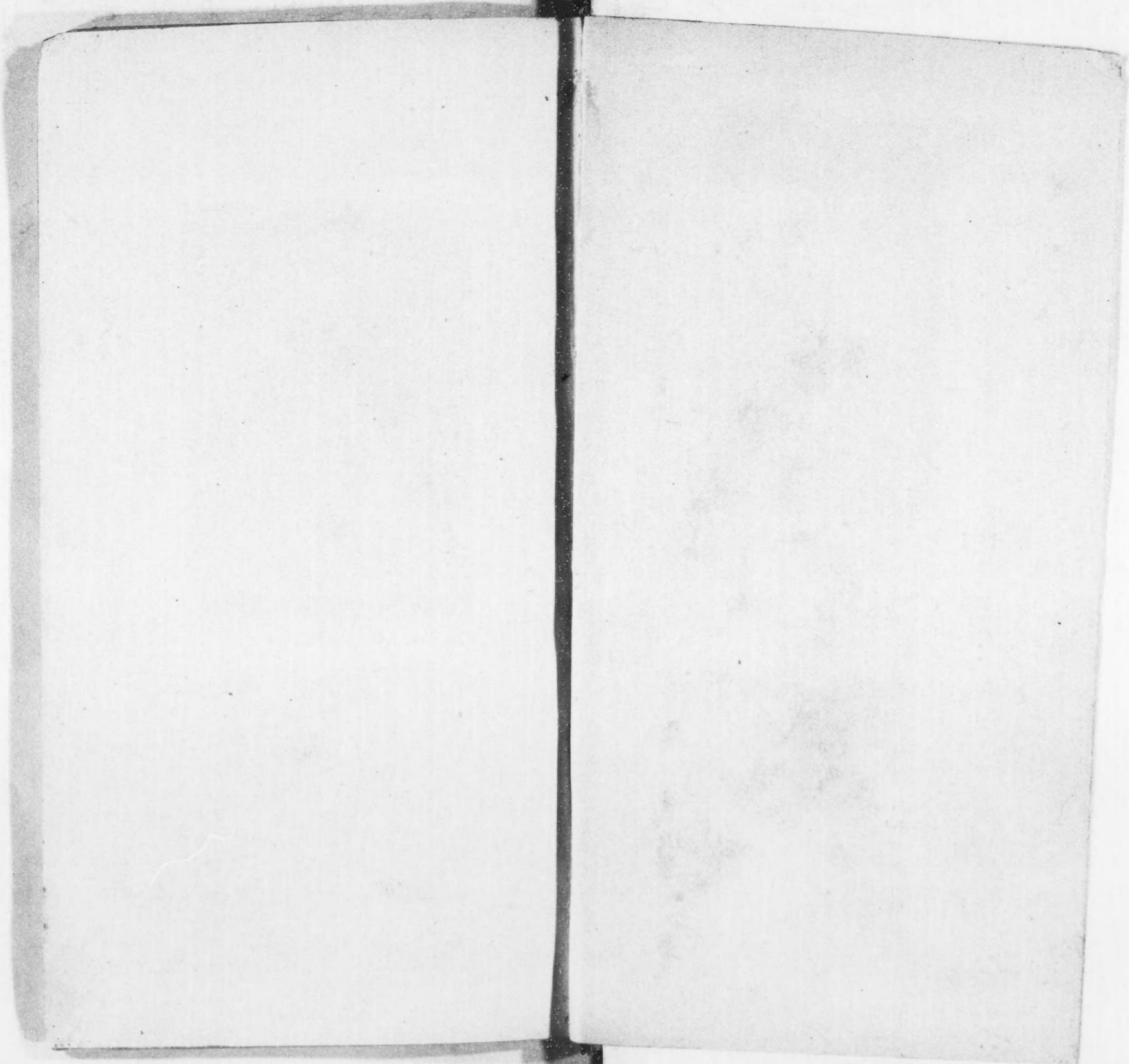
始













特109

408



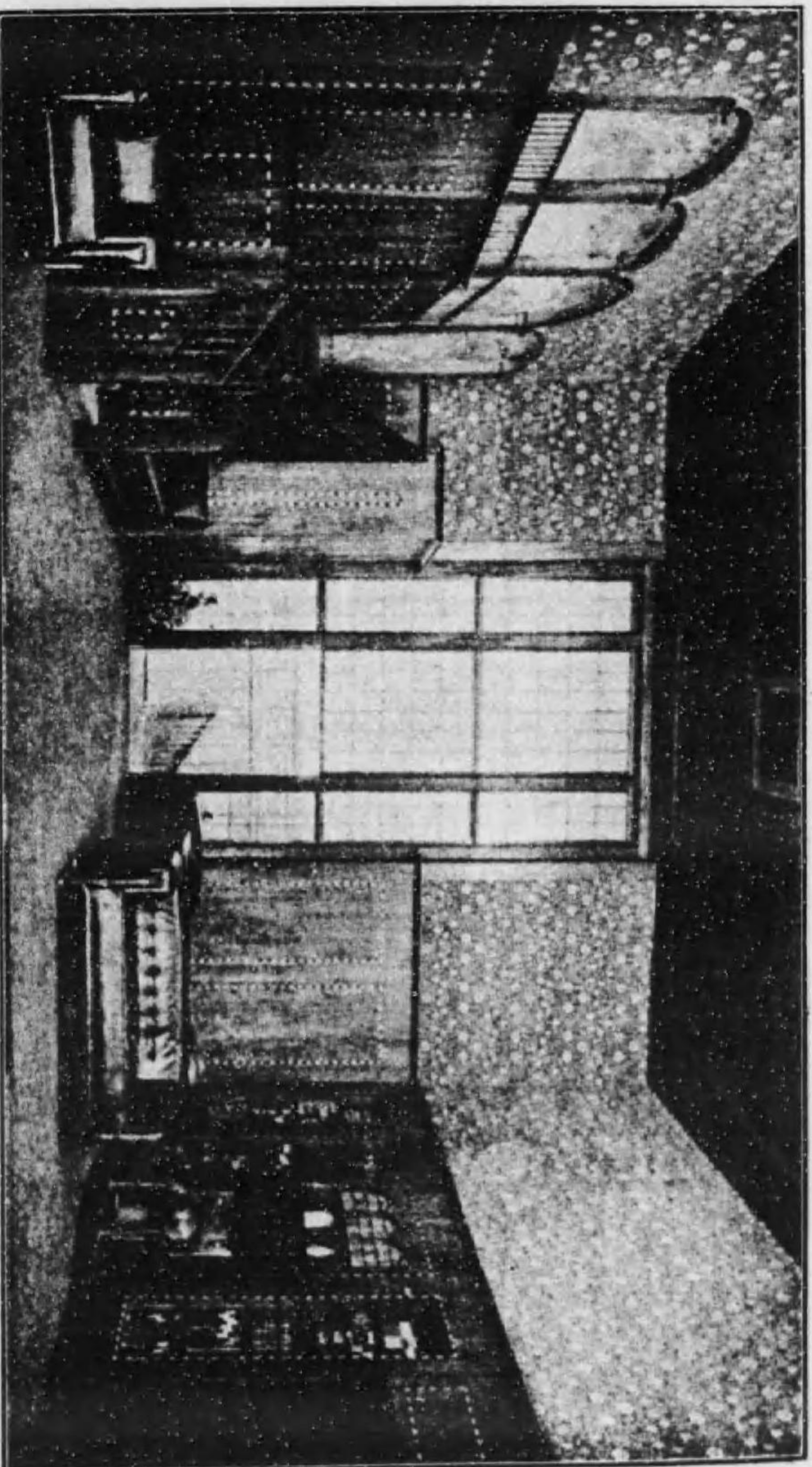
G. B. SHAW

2. 9. 10  
内交



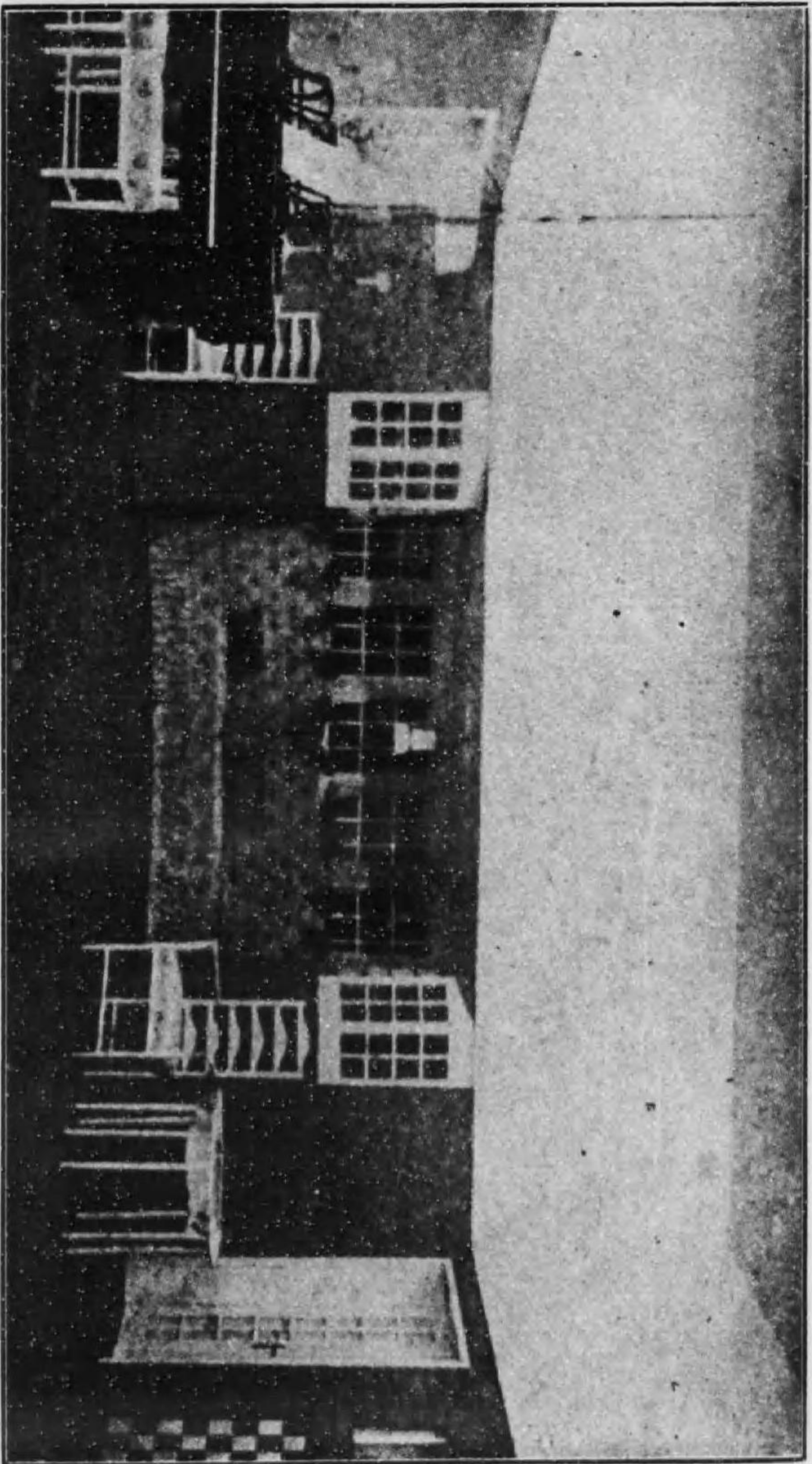
G. B. SHAW





戀をたわさる人の舞臺装飾  
カスア・カサマソノ氏考案(一)





戀をなわさる人の舞臺裝飾  
カスア・カサマソフ氏考案(二)



### 近代脚本叢書發刊について

兩三年前から、文壇の中心興味は、漸く小説から劇の方面に移つてまゐりました。新しい劇、面白い脚本、此聲は現下の文壇の凄まじい絶叫であります。少くとも新しい文學を語り、進んだ美術を味はふんとするものは、綜合藝術の粹である劇を知らなければならぬこととなりました。現代の此要求に應ぜんが爲に生れた近代脚本叢書は、泰西名家の手に成つて好評噴々たり、文壇知名の翻譯家によりて移植せられた傑作、并に我劇作名



家の筆に成つた佳篇を續刊し、近代人の渴を醫せんとするウオトカであります。劇界革新の曙光、新文壇の寵兒であります。蓋し此叢書の盛にもて囃されると否とは、我新興文壇の趨勢の果して如何なるかを示して餘あるものと信じて居ります。敢て一讀を新しき近代人におすゝめ致します。

大正二年二月

現代社主人敬白

## 序

戀をあさる人はシヨオの作品の内ではあまり好い出来ではない。残酷に過ぎると云ふ評を何處かで見たが、残酷と云ふよりも寧ろ全體が機械的になつてゐる。

シヨオは元來カリカチュアの名人である。うまく成功した場合には、非常に單化せられた多くの性格が有機的な微妙な合奏を現出し、文明に對する鋭い皮肉と冷笑の底から人生の深い味が滲み出



て来る。併し拙く行くと、小股をすくつたやうな上滑りのした調子が強く現はれて来る。戀をあさる人などにはこれが明らかに認められる。その代りこの場合には、皮肉や冷笑がそれだけの者として一層鋭く利いてゐる。

戀をあさる人はシヨオの代表作として薦めらるべき者ではないけれども、深い味は別として、單にシヨオの皮肉や冷笑が如何に際物的に日本現在の文明に突き當つてゐるかを見るためには、最も恰好である。ウオオレン夫人の職業やバアバラ大

佐などの皮肉は日本の社會にはあんまりこたへない。

戀をあさる人の出たのは、よくは知らないが十四五年か或はもつと前になるであらう。丁度その頃の英國劇壇の機運が、現在の日本劇壇の機運に類似してゐるとすれば、英國ではもう骨董になつてゐるシヨオの洒落も日本で新らしく活き返らうと云ふものである。また婦人運動にしても、大蔵大臣の別荘を粉微塵にしやうと云ふ様な現在の意氣から見れば、「女は男の奴隸ではない」と云ふ氣





戀をあさる人

焰などは、思へば古いと云はなくてはならぬ。然しそれが日本へ來ると『新らしい女』の問題にぴつたりと合ふのだから面白い。

——翻譯に就ては出来るだけシヨオの氣持を出すことに努めたが、思ふやうには行かなかつた。性格に就ての解釋が見當違ひであつたり、また字句の誤譯などがあつたらば、教へて頂きたい。

譯者



第一幕

倫敦のグイクトリヤ區のアシユレエ公園地に於けるフラットの客間で貴婦人と紳士が内密話をして居る。夜の十時過。壁に掛てある芝居の寫眞や版畫は、ケムプルのハムレット、シドンス夫人のカサリン女王、マクレデイのウエルネル(マクリスの摸寫)、ヘンリイ・アアヴィンク卿のリチャード三世(ロンカの摸寫)、エレン・テリイ嬢、ケンダル夫人、アダ・レハン嬢、サラ・ベルナル夫人、ヘンリイ・アアサア・ジョオンス氏、ヒネロ氏、グルンデイ氏等だが、然しデュウセ嬢と凡てイアセンに關したものは一つもない。室の隅の一方は戸口が斜に附き他方は張出窓で圓く仕切つて、其中にシエクスピアの像を据え、像の周圍に植木鉢

を並べて居る。爐は戸口のある方の側。傍に脇突椅子。同じ側の少し手前に小さな圓卓子と椅子。卓子の上には黄表紙の佛蘭西小説が開いた儘置いてある。シエクスピア像の側には蓋を開けたグラランドピアノを、鍵盤を壁に直角にして据え、臺の上には樂譜あだし唇の形の好い笠を被せた白熱燈がピアノと爐棚の上から、ピアノの側のソファアに相擁した男女を輝して居る。婦人はクレエストランフィイルドと云ふ。三十二歳位、すらりとした、柔婉な、表情のきびきびした女。今は刹那の情熱に打ち負かされて居るが、きつと結んだ唇、びんとした眉、締つた頬、優美な態度などは決斷心と自尊心の強い女だと云ふことを現はして居る。着附は夜會服。紳士レオナード・チャアテリスは稍年上。奇抜な垢抜のした調子に、天鷲絨のシャタツとカシミヤ



の袴ズボンを着つく。襟カラは襦レ衣ツに附ついて居かて紺こん青色せいろで藍ター寶石コイの環わで留とめ  
た栴ガ檀ネ石ト色の印いん度ど絹ぎよのスカアアの上うに開ひらいてある。足あしには青あおい  
襪くつしたと革かわの履サンダルを穿はいて居かる。黄くわん絹かづの頭あたま髪かみ上う鬚ひげは皆みなわざと洒しゅ落れ  
て自然しぜんの儘ままに放はなちしてある。其その不ふ眞ま面目めらしい情じやう熱ねつ、敏びん捷せつな快くわい  
活くわつな抜ひ目めのない態度たいどは、女おんなの、誠まことの籠こもつた優やさしい品ひん位ゐある態たい度ど  
と、烈ほつしい對たい照せうをなして居かる。

チャアテリス。(わざとグレースを抱かきて)可愛かいね。

グレース。(熱烈ねつれつに應こたへながら)あたしだつて。あなたは嬉うれし  
いとお思おもひになる。

チャアテリス。有う頂ちやうてん天てんさ。

グレース。あゝ嬉うれしい。

チャアテリス。可愛かい奴やつだな。(愉快ゆかいらしく溜な息いきを吐つき、女おんなの手てを  
執とつてじつと顔かほを見みる) キスはもう何なにうしても仕しない  
よ。あんまりのべつに行いつて居かると、全まく馬ば鹿かの様よう  
になるからね。さ、何なにか話はなさう。(手てを放はなし、少すこし離はなれて  
腰こしを掛かく)

グレース。一體いっ今こん度どのは初はつ戀こひかい。

グレース。あたしが後ご家けだといふ事ことをお忘わすれになつて。

それともトランプトランプファイルドと結けつ婚こんしたのは黄か金ねの爲ためだ  
とお思おもひになるの。

チャアテリス。そんな事ことを知しるものか。然しかしああの男をとこを愛あいし



てなくつたつて他にいゝひとがなかつたから仕方  
なしに結婚した——のかも知れないぢやないか。若  
い時分にはね、何んなものかと思つて、單に好奇心  
からよく結婚するものだよ。

グレエス。 そんなに氣になるならほんとの所を云つて上  
げませう。これはあなたに何してから解つた事なん  
ですけど、あたしは決してトランフィルドを好いち  
やみませんでしたの。でもあたしを愛してくれたか  
ら私も好きでしたわ。あの人はね、あたしを愛する  
ためにすつかり好い性質を出しちまつたんですもの。

それであたし、それから常住だれか他の人を愛し  
て見たいと思つてましたのよ。ねえかうしてあなた  
はあたしに愛されて居るんだから、丁度あたしがト  
ランフィルドを好いたと同じ理で、あなたもあたし  
を可愛がつて下さるでせう。

チャアテリス。 僕があなたに結婚しやうと云ふのはあなた  
が好きだからさ。僕は誰だつて可愛がる、——奇麗  
な女でさへあれば。

グレエス。 眞面目に云つてらつしやるの。

チャアテリス。 無論さ。 なあせ。



グレエス。(考へる態) いゝえ。何でも無いの。ちやあたし  
伺つてよ、此度のはあなたの初戀。

チャアテリス。(あまり問が單純なのでまごつく) いゝえ幸にし  
てさうちや無い。二度目でも三度目でもない。

グレエス。でも、眞面目な戀の事を云つてるのよ。

チャアテリス。(一寸考へる) さうさ。(問、女が半信半疑の状にあ  
るのを見て、云ひ悪いのをば無理に口へ出す) だがまあ、  
ぼくが眞面目なのは今度が初めだ。

グレエス。(さぐるやうに) 解つたわ。他のもみんな眞面目  
だつたんでせう。

チャアテリス。さう一概に云ふものぢやないよ。

グレエス。幾度。

チャアテリス。まあ一度だ。

グレエス。ジュリア・クレエヴン。

チャアテリス。(身を引く) 誰から聞いた。(女は神祕らしく頭  
を振る。男は憤然として遠ざかる) そんな事は口にしな  
いが好い。

グレエス。(やさしく) どうも濟みません。(手を伸して、柔り  
と男を引き寄せ様とする)

チャアテリス。(機械的に引き寄せられ、女の手を腕の上に置かせ



ながら、いちやつきを元に歸さうなどとはせず、頑固に腰を掛く。五分前とは餘程手ざはりが荒くなつてませう。

グレエス。何を被仰るの。

チャアテリス。僕は何だか、かう、體が堅い胡桃にでもなつた様な氣がする。これもジュリア・クレエヴンの事を聞かせて貰つたお蔭だ。(肱を膝の上に突き、右手で頬を支へて思案する) かう云ふ風に二人で腰を掛けて居るとちやうど同じやうにして、あの女とも腰を掛けたものだ。

グレエス。(身を縮める) ちやうど同じやうに。

チャアテリス。(真直に坐り、斷乎として女に面す) 全く同じ様にね。手を握り合つたり、頬をすり合つて、他愛もない話を聞かせてやつた。(女は心の奥底まで冷りとしたやうにソファから立上り、鍵盤を背にしてピアノの腰掛に腰を掛ける) こんな話はもう聞きたか無いでせう。其の方が結構。

グレエス。(非常に心持を悪くしながら、それを押へて居る) そして何時お切れになつて。

チャアテリス。(おづく) 切れる。

グレエス。(きつぱりと) え、お切れになつたんでせう。



チャアテリス。こうつと。僕達の戀は何時初まつたつけ。

グレエス。その時前の戀をお捨てになつたのね。

チャアテリス。(意地悪るく、次第々々に前の戀人と切れて居ない事を知らせる) 勿論、其時切れなげやならない事は確かだつた。

グレエス。で、お切れになつたんでせう。

チャアテリス。えゝ、僕は切れました。

グレエス。そしてあの方は。

チャアテリス。(立上る) 後生だから、他の話にして頂戴よ。

ピアノの側なんか居ないで、さ、此處へ被居つし

やい。(一步女に近づく)

グレエス。いゝえ。あたしも手ざはりが荒くなりましたわ。今はもう胡桃よりも堅う御座んすよ。さ、あの方はどうなすつて。

チャアテリス。まあ、落ちついておくれよ。あれには切れなきやならない理をこまゝと聞かせたんだ。

グレエス。御承諾なすつて。

チャアテリス。兎に角ね、あゝいふ女のやり相なことを遣つたよ。僕が面と向つて話すとあの女は斯う云ふのだ。今話していらつしやるのはほんとうのあなたぢ



やない。ほんとうのあなたが未だあたしを愛してゐらつしやる事はよく知つて居ます、だとき。其次は手紙でめちやに直截的に書いてやつた。さうすると丁寧ていねいに讀よんちまつてから返かへして寄越よこして、こんな手紙がみを開あける勇氣ゆうきはないけれど、こんな物ものを書いて恥はぢと思おもはないかと云いつて來きた。(女の傍わらわに來きて、左手ひだりてで優やさしく女の頭あたまを巻まく) ね、彼奴あいつは自分じぶんの運命うんめいに面めんする事ことが出來でないのさ。

ダレエス。(手を振り放し、腰掛の上で少し體を捻ぢる) あんまりべらべら出るから本當ほんたうらしく聞きえないわ。

チャアテリス。所謂いはゆる「愛憎あいそうづかし」をやる時には、ピアノの一等細とうほそい絃げんを敲たたいても、女の耳みみにはこれつ位くらゐに聞きえるものだ。(鍵盤の低音の端をガンと敲く。女は耳を指で蓋する。男は立上りピアノを離れて) いや、僕は親切しんせつでもあつたし、また開あつ放はなしてもあつた。お人好ひとよしの人間にんげんに出來でる事は皆みんなやつた。それだのにあの女をんなは、これは喧嘩けんかを買かひに來きたんだとばかり考かんがへたのさ。(ダレエス後に退あひく) 開あつ放はなしと親切しんせつ、どつちもよくない代物しろものだ。殊ことに開あけつ放はなしつて奴やつは感心かんしんしない。けれども僕は兩方りやうほうともやつて見た。(男は爐の側に行き火に面して



立つ。マントルピース 爐棚の上の裝飾を見ながら手を暖む

グレエス。(聲を少し張つて) ぢや、何うなさらうと云ふの。

チャアテリス。(爐傍の敷物の上からふりむく) 實行さ。結婚さ。

結婚しないぢや到底あの女は信じないだらう。何故

かつて云ふと、僕は以前に随分戀をあさつて居て後

にやつとあの女に落ち附いた理なんだからね。

グレエス。それがあたしとの結婚の理由。

チャアテリス。まあ、さうだ。ねえ、ジュリアから救つて呉

れるのはあなたの任務でせう。

グレエス。(立上る) そんな事なら御免を蒙ります。さうい

ふ道具に使はれるのは嫌ですもの。外の方からあなたを横取りしやうとは思ひませんわ。(不安な調子にて室を彼方此方と歩く)

チャアテリス。横取りするつて。(女に近づく) グレエス。僕

は新らしい女としてあなたに聞きたい事がある。好

いかい。新らしい女として。一體ジュリアは僕の所有

物かい。僕は所有主かい。

グレエス。いゝえ女は男の所有物ぢやありません。自分

自身のものです。

チャアテリス。さうさ。どこ迄もイブセンだ。僕も全然さ



う思ふ。ちや、云つて御覽。僕はジュリアのものかい。それとも自分自身のものかい。

グレエス。(當惑したる調子) 無論あなたは自分の――

チャアテリス。(勝誇つて女の語を遮り) ちや、横取つて事がありますか。(女の肩を捕へ、自分の兩腕を眞直に伸して) どうだ、可愛い哲學者。イブセンのソオスが雌鵝に好ければ雄鵝にだつて同じやうに好からうちやないか。それに、(女を宥める) ジュリアとの間はじやうだんに過ないんだ。全くだよ。ほんとだよ。

グレエス。(男を振り切る) そんならなほいけないわ。あな

たの女たらしはあたし大嫌ひ。お互の恥ぢやありませんか。(ソオファに行き、ピヤノと反對の端に腰を掛けて、沈みこんで體を肱にもたせかけ顔を蔽ふ)

チャアテリス。グレエス。あなたはすつかり僕の女たらしのもとを誤解して居るんだ。(女の側に腰を掛ける) お聞きよ。僕は飛びつ切りの好男子かい。

グレエス。(男の語に驚き) いゝえ。

チャアテリス。(誇らしき態度) さうだらうとも。ちやお洒落かい。

グレエス。いゝえ、あんまり。



チャアテリス。無論、左様ぢやない。ぢや僕に浪漫的な神秘的な魔力があるかい。僕の胸に秘密な悲哀が喰ひ入つた様に見えるかい、僕は女に親切かい。

グレエス。いゝえ。ちつとも。

チャアテリス。無論さうぢやない。誰だつて認める事だ。

ぢや、僕と話をする女の半数迄が僕を戀するのは誰の罪だらう。僕の罪ぢや確にない。僕は戀なんかはもう嫌だ。あきあきしぢやつた。でも初めはね、そりや嬉しい心地もしたさ。そこへ附け込んでジュリアが成功したんだ。あれは眞先に切り出す勇氣があつ

たんだからね。然しすぐ飽きぢやつた。抑も僕は自分から手を出したり、能動的に女を苦しめたりした事はないんだよ。いつでも女の方から迫つてくる。尤もあなたは例外だが。

グレエス。例外なんか造へなくつたつて好いわ。あなたを此家へ訪ねて來させるには並大抵な苦勞ぢやないんですもの。あなたは餘程内氣なのね。

チャアテリス。(嬉しいげに手を執り) 内氣に見えたのは手管さ。僕はあなたを初めつから愛して居ただけれど追掛けて貰ひたさに逃げて見たのさ。だが、さ、何か本



當に面白い話をしやう。(兩腕にて抱く) 僕を世界中で  
一等愛して呉れる。

グレエス。 貴君はあんまりひどく愛されるのはお嫌なん  
でせう。

チャアテリス。 人に寄るさ。あなたなら、(胸に押しつける)  
いくら愛して呉れたつて足りつこはない。僕は毎日  
あなたの冷かなのが氣になつて居るんだ。あなたの  
—— (騒がしく戸を敲く音。二人は驚いて相擁した儘、息を  
殺し耳を傾ける) こんなに遅く、一體何だらう。

グレエス。 私にも解らないわ。(二人は戦々兢兢として耳を

敲てゝ居る。フラットの戸が外から突き開けられたので二人  
は慌てゝ腕を解く)

女の聲。(室の外より) チャアテリス様はいらつしやいません  
か。

チャアテリス。(躍り上る) ジュリア、畜生め。(ソオファの端に  
手を置き、立つた儘つと戸を凝視て前に屈む)

グレエス。(立上り) 何の用でせう。

女の聲。好う御座います。自分で申上げますから。(美し  
い、愁を帯びた、悲劇的な顔附の女。外套と帽子を着けて、  
入口に現れる。憤然として) おや、まあ、御結構ね。お



樂しみな所を大變御邪魔致しました。え、え、惡魔。

(女は眞直にグレエスに近く。チャアテリス、ソオファの後から驅けて行つて留める。大混亂。グレエスは悠然と構へて靜かにピアノの側へ退く。ジュリアは男の力には敵はぬと思ひ諦め、手を放す序に男の顔を打つ)

チャアテリス。(驚いて) お、ジュリア、ジュリア。餘りぢやないか。

ジュリア。餘りですつて。一體あなたは此所であのかたと何をしてゐらしつたの。惡黨。まあ、レオナアド。あなたはあたしを絶望の淵にお突き込みになつたの

ね。私はもう破れかぶれです。もう辛抱が出来ません。あの方に横取なんかさせるもんですか。

チャアテリス。しいつ。

ジュリア。いゝえ、いゝえ。もうやけよ。あの方のほんとの品性を皆の前でさらけ出してやるから。あなたはあたしの物ぢやありませんか。こんな處に居る理はないのよ。あの方だつてお存じだわ。

チャアテリス。お宅へ送つて上げやう。それが好い。

ジュリア。いゝえ。あたしは歸りません。此處に居るんです。あの方にあなたを捨てさせるまで此處に居る



んです。

チヤアテリス。馬鹿をお云ひでない。トランフィイルド夫人が嫌だとおつしやれば此處に居る事は出来ないのぢやないか。ベルさへお鳴しになれば僕達は追出されるのだ。

ジュリア。ぢや、さうして頂きませう。お出来になるならベルを押して御覽なさい。あたしが悪名を言ひ立てたら、あの清いお方はどんな態度をお執りなさるでせう。それからあなたがどんな顔をなさるでせう。それを拜見致しませうよ。あたしにはちつとも損に

ならない事です。あなたが私をどうなすつたかつて事は誰だつて知つてるんだし、あなただつて征服したんだつて意張つてらしつたんだもの。あなたやあの方のお友達の間によあたし、評判になつてるのよ。おや自分の都合の好い事はかり考へて居た。(外套を脱ぎ捨てる) 本當に私は不幸な女ですわねえ。けれどあなたの考へてゐらつしやるやうな馬鹿ぢやないわ。さ、私は坐り込んでよ。(外套を圓卓子の上に投げ其上に帽子を置きて腰を掛く) さあ、奥様、そこにベルが御座います。(爐傍の釦子を指さす) 何故御鳴しなさらないの。



(グレエスは熱心にチャアテリスを眺めて動かす) ほほ、、、  
左様だらうと思つた。

チャアテリス。(静かに、ジュリアを監視しながら) トランファイル  
ドさん、なるべくなら他の室へいらしつて下さい

(グレエス戸口に行かうとしてジュリアの氣配を見、立すくむ  
チャアテリスに眼くばせすると、男は一步前へ出てジュリアを抑  
制する)

ジュリア。行かせないわ。留らせて見せるわ。あなたが  
どんな男で、どれ程あたしを愛して下すつたか。た  
つた二日前にあたしをキスして未來を契つて下すつ

たのだもの。それを皆教へてやるわ。(急に泣き出す)  
さうぢやありませんか。嘘だつて事が云へるなら云  
つて御覽なさい。

チャアテリス。(グレエスに低く) 早く。

グレエス。(冷かな不愉快な顔をして出て行く) 成る丈早く追ひ  
出して頂戴な。

(グレエスが寢椅子の後より戸口に歩み寄るのを、ジュリアは憤  
怒の叫び聲を嘯み殺して飛び掛らうとする。チャアテリス、こ  
れを押へて動かせず。グレエス出て行く。チャアテリス確乎と  
女を抑へ、安全に出られたかどうかと戸口を顧みる)



ジュリア。(急に腕うでくのを止めつんとした凄味のある顔附になる)

あゝ、もう騒さわがなくなつても好いい。(男は寢椅子に行き、  
端に倚り掛つて喘あせぎながら顔の汗をふく)本當ほんたうにあなたは  
頼たのもしいのねえ。あの女ひとの前まへで腕力わんりよくであたしをいぢ  
めるなんて。(涙に咽なぶ)

チャアテリス。(愁おもはし氣きに何事なにごとをか自覺じかくした調子にて傍白かもしろ)面白おもしろ  
くなり相あひだぞ。さあ、辛抱しんぼうだ、辛抱しんぼうだ。(圓卓子の側わたりの  
椅子いすに腰こしを掛かく)

ジュリア。(怒いかりの面持おもて)レオナルド。あたしの事ことは何なんとも  
思おもはないの。

チャアテリス。思おもつてるさ。どうかして此處こゝから安全あんぜんに連つ  
れ出ださうつてね。

ジュリア。(烈いたしく)動うごくもんですか。

チャアテリス。(疲つかれた調子)よろしい。(深い溜息ためいきを吐つく。二人  
は暫しばらくく沈黙しんもく。ジュリアは分別心ぶんべつしんを引き込めて、なるべく永ながく狂  
亂くるわんして居ゐやうと努つとめる)

ジュリア。(急に立上たちあり)あたしあのかたに云いひたい事ことがあ  
る。

チャアテリス。(躍はり上ある)いや、いや。もうあんな相撲すまよは御ご  
免めんだ。考かんがへても御覽ごらんよ。僕ぼくはもう四十よじゅうに手てが届とどく。



あなたでは若過るんだ。まあお掛け。でなきや歸るか。あの方のお父様が歸つて居らしたたら何うする心算だ。

ジュリア。

そんな事は知らないわ。それはあなたの問題よ。あの方があなたを思ひ切つたら、すぐ行くわ。それ迄は此處に居るのよ。それがあたしの條件よ。

思ひ切らせるのは、あなたの義務ぢやありませんか。  
 (女は決然として腰を掛く。男は暫く女の顔を凝視する。やがて決心して寢椅子に近づき、女と反對の端に近く腰を掛け強烈な語調で話し出す)

チャアテリス。あなたに對する義務などは決して無い。

ジュリア。(責める調子)無いんですつて。面と向つてよく

もそんな事が云へてねえ。

チャアテリス。まあ好く考へて御覽な。始め知己になつた

時はあなたは新らしい考方を持つた女だと云ふ事だつた。

ジュリア。だからあたしを一層尊敬なすつたんでせう。

チャアテリス。(穩かに)そうさ。だけれどそりや問題ぢやない。新らしい考へ方を持つた女としてあなたは自由の身になる決心をした筈だ。結婚つて者は女が妻と



いふ社會上の地位と、老年になつて扶養されるといふ自分の權利とのために、一身を男子に賣却する卑しむべき契約だ——と云ふ御意見だつた。確に新しい思想であり、またわれわれの主張だ。それから、もしあなたが僕と結婚したら、僕は飲だくれか罪人かひよろひよろの病人かになつたかも知れない。そうすればあなたは身を抜く事が出来なくなる。大變な冒険ぢやないか。われわれの意見は全く合理的だ。だからあなたは、もし僕たちの友情があなたの——何とか云つたつけね。そうだ、——人間としての自

由な發展と兩立しなくなつたら、何時でも僕を捨てて好いと云ふ權利を握つて居る。斯ふ云ふ風にあなたはイブセン式の考へ方即ちわれわれの考へ方を實行したものだ。それで僕も美的な戀を味ふ人を以て満足して居たのだ。それでいろんな事も覺えるし、時々は全く幸福だとも思つた。

ジュリア。　ぢや、何かあたしに負ふ所があるつておつしやるのね。

チャアテリス。(傲然と)いゝえ、受取つた丈は拂つた。あなたは僕から何か覺えた筈だ。第一、僕達の交際は愉



快ぢやなかつたかい。

ジュリア。(眞面目になり烈しき調子にて) いゝえ。あたしは幸福な瞬間のために、全く高い犠牲を拂つてよ。あなたにはあたしに戀して、戀の奴隷になつて居るものだから、其苦しみの腹いせをあたしにしたんだわ。あたしはもう常住不安で、手紙が来ればもしか針を含んでやしないかと思つて震へるし、訪問して下さつても、待つ間の心配よりもつと苦しい思をしたわ。あたしはあなたの玩具で、友人ではなかつたのねえ。(咽びながら立上る) あゝ、あたしの幸福は苦勞ばつか

りだ。嬉しいんだか、苦しいんだか、區別がつきはしない。(ヒヤノの腰掛に打ち伏し、顔に手をあて、男に背を向ける) あゝ、あなたを知らなきやよかつた。

チャアテリス。(怒りて立上る) 何だけちな。僕があれ丈御機嫌を取つたのに、其れが御禮の語か。僕はこれ迄だつて随分蟲を殺して堪へて居たんだ。あなたの新しい思想つてもものは、丁度流行でも追ふ心算で、何處かから拾つて来たものだ。だから實は新思想の片端も解つて居ないんだと云ふ事を、知己になつてから二週間目には、ちやんと見破つたんだ。あなたは



自分では自由なんて事を口にしながら、僕に對しては、いくら嫉妬家の妻君だつて云ひ相もない事を要求したぢやないか。僕の女友達に就いちや、どれもこれも老ぼれたの、醜いの、不徳だのと——

ジュリア。(急に顔を舉げて) だつてさうなんですもの。

チャアテリス。よろしい。それぢや、あなたにでもわかる愚痴にしやう。一體僕の大嫌ひなのは、辛抱の仕切れない嫉妬の癖だ、佛頂面だ、當推量で悪口する事だ。そればかりか、本當に僕を打つたり、手紙を盗んだら——

ジュリア。(立上り) え、立派なお手紙。

チャアテリス。もう二度と盗まぬといふ仰々敷誓を立てちやそれに背いたり、幾時間も——いや幾日も掛つて僕の反古籠の中の紙片をつぎ合せて見たり、さうしちや、聖者か殉教者が迫害されたの瞞されたの云つた風な顔をしてやつて来る。

ジュリア。手紙を読むのは當前ぢやありませんか。お互に信じ合つて居たんですもの、それ位は私の権利よ。チャアテリス。有難い事つた。そんな権利を造り出す信用は大急ぎで打壊さうよ。(不機嫌にソオフアに掛ける)



ジュリア。(右手をソオファの後に載せ、男の上のし掛りて威すやうに)あなたにはそんな事をする権利はありませんよ。

チャアテリス。あるともさ。あなたが僕との結婚を拒んだ理由は――

ジュリア。拒みやしなかつたわ。あなたが申込まなかつたんぢやありませんか。結婚して居ればあなただつてこんな酷くは當らなかつたでせうねえ。

チャアテリス。(強いて議論に歸る)僕達は新しい人間として結婚をしない筈になつて居た。其理由は規則にもあ

る通り、飲だくれか――

ジュリア。罪人か病人か鼻つまみな人間かになつたかも知れない。さつきも聞いてよ。(男の側に投げる様に腰を掛く)

チャアテリス。(丁寧に)どうも失禮しました。僕はつい繰返す癖がありますから。要點はあなたが何時でも勝手な時に僕を捨てる自由をお持ちだと云ふ事です。

ジュリア。それがどうしたとおつしやるの。あたしはあなたを捨て様とは思はないわ。あなたは飲んだくれにも罪人にもならなかつたのですもの。



チャアテリス。未だあなたは要點が解つて居ない。もし僕が墮落したら捨て、も好いと云ふ權利をあなたが持つて居ると云ふ事は、もしあなたが墮落したら捨てても好いと云ふ權利を僕が持つて居るつて事なんぢやないか。

ジュリア。甘い理窟ね。失禮ですがあたしが飲だくれで罪人で病人だつてやうな者になつたんで御座いますか知ら。

チャアテリス。三つ併せたよりもつと悪い嫉妬やきのおはねになつたぢやないか。

ジュリア。(切なげに頭を振る)はいはい。何となりともおつしやいまし。

チャアテリス。では僕は何時でも勝手な時にあなたと切れるといふ權利を宣言するよ。新しい思想は又新しい義務を供つてる。もしあなたが男を脚下に屈服させやうなど、考へれば新しい女にはなれない。男を無理に繋ぐなんて事は古い女の事だ。新しい人は美的な交際を結ぶ。古い人は結婚する。結婚は多くの人に適して居るが、第一の義務は服従だ。友情は或種の人にしか適しない。そして第一の義務は



お互に感情が變つたと云ふ知らせを猶豫なく承諾する所にある。あなたは結婚を捨て、友情を執つたのだから、其義務を盡して、僕の申出を承諾なさい。

ジュリア。いゝえ。どうあつても。あたし達の約束したのは神様の——神様の——

チャアテリス。そうさ。けれどそんな事はどうだつて關はない。新らしい女の信じない者の前でやつた事が何になる。

ジュリア。(男の足元に身を投げて) おゝ、レオナアド。そんなにいちめないで頂戴。あたしにや議論や考事は駄

目なのよ。あたしは唯あなたを愛して居るのよ。あなたはあたしが結婚を申込まなかつたから怒つて居るんでせうけれど、あたしはあなたから申込んで下されば何時だつて結婚する心算で居たわ。さあ、あなたさへ好きや、今からだつて結婚しませう。

チャアテリス。嫌だよ。明白な事だ。智識の上で兩立しないんだから。

ジュリア。何故。だつてきつと幸福になれてよ。あなたはあたしを愛してるんだわ。あたしは知てるわ。そんな気がするんですもの。今夜だつてさうだわ。あ



たしの悪かつた事は百も千も承知して居るから、辯護はしないけれど、あんまりひどくしないで頂戴な。あなたと離れるなんて事を考へるとあたしはもう堪ないわ。あなたがなければ生きては居られないんですもの。あなたに逢つた時は本當に嬉しかつたわ。外の男なんかにも眼も呉れなかつてよ。あなたさへさう仕向けて下さればあたしは獨りぼつちで辛抱してよ。でも今ちや駄目、あなたが傍に居なきや嫌です。あたしが一生懸命になつてるのに眼も呉れないであたしを捨てるなんてする分だわ。あなたが望みな

らあたし、お友達にもなれるわ。譯を話して仕事を別けて下すつて、そして閑な時の玩具にするのを廢して下されば。お、レオナアド、レオナアド。あなたは機會を與へて下さらなかつたんですもの。本當にさうなんですもの。これから骨を折つて讀んだり考へたり嫉妬を押へたりしますから——（泣き咽び、膝の上で頭をやけに揺り動して悶える）あ、あたしは狂ひ相だ、狂ひ相だ。捨てるのは殺すのも同じだわ。チヤアテリス。（肩をやさしくたゞきながら）好い子だからそんなに泣かないでおくれ。そう一圖になつたつて僕に



もどうも仕様がなないんだからねえ。

ジュリア。

(男が立上りて、穩かに助け上げるのを咽びながら從

ふ) 仕方がなかないわ。一言云つて下されば二人共  
幸福になれるんぢやありませんか。

チャアテリス。

(圓滑に) さあ、本當に行かなきゃならない。

カスパアソンが歸つて來るまで居る理には行かない  
んだから。(優しく放して卓子から外套を取つてやる) さあ、  
外套を着て機嫌をお直し。今晚は随分恐ろしい思を  
させられた。少しは考へて貰はなくつちや。

ジュリア。

(再び危険になる) ぢや追ひ出されるのね。

チャアテリス。

(優しく) 帽子をおつけよ。ね。(外套を肩に掛

けてやる)

ジュリア。

(切なげな笑ひ泣をする) はいはい。云はれる通り

にしなきやならないのねえ。(卓子に行き帽子を探す。卓  
子の上の佛蘭西小説を見て) まあ御覽なさい。(男の前に突  
き出す) 何でもものをあの方は讀んでるんでせう。穢は  
しい佛蘭西本よ。慎しい婦人なら手にさへしないの  
に。そしてあなたが——あなたが一所に讀んで居た  
のねえ。

チャアテリス。

あなたが僕にその小説を推薦したのぢやな



いか。

ジュリア。 ふん。(床に投げつける)

チャアテリス。(心配氣に馳せ寄る)品物を痛めちやいけない。

(拾ひ上げて塵を拂ふ)お芝居をするのは感情の問題だけれど物を壊すのは眞面目な事だ。(本を卓子の上に置く) さあ。行かう。お願いだから。

ジュリア。(穩かに)あなたはお歸れになれるわ。お差支がないんですもの。あたしは動かないわ。(頑固にソファの上に腰かく)

チャアテリス。(堪え兼ねた調子)おいでつたら。僕は又同じ

事を繰り返し度ない。僕の忍耐にだつて限りがあるんだ。 さあ。

ジュリア。 参りませんたら参りません。

チャアテリス。 ちや左様なら。(決然と戸口へ行く。女は走り寄り道を塞ぐ)あたしに行けと云つたのかと思つた。

ジュリア。(戸に寄りて)私をおいてけぼりにはさせないわ。チャアテリス。 ちや一所に行かう。

ジュリア。 でもあなたがあの方を捨てるつて御誓ひになるまでは。

チャアテリス。 何でも誓つて上げるよ。直ぐ出て行つてく



れるなら。そして此ごたごたに極りを附けてくれるなら。

ジュリア。(當惑して疑はしげに) 本當に誓ふ。

チャアテリス。嚴肅にさ。さあ誓の語をおつしやい。半時間も前から待つて居たんだ。

ジュリア。(失望する) 又戲談だ。あたしは誓の語なんか要りません。眞面目に約束して下さい。

チャアテリス。御尤。——直ぐ出て行くつて條件付なら何でも約束しやう。紳士として、英國紳士として、——何でも御望の者として神かけて誓ひます。僕は再び

あの女に逢つたり話したり氣を引かれたりする事は致しません。さあ、行かう。

ジュリア。でも。眞面目なの。約束を守るつもり

チャアテリス。(冷かに笑む) 復解らなくなつて來た。つまらない事を云はないで蹠いていらつしやい。兎に角僕は行く。あなたを擔いで行く程強かないけれど、突き飛ばして出て行く分には譯はない。しかしそんな事をするると又ひどい事をしたなんて苦情を持ち込むだらう。(一步戸口に近づく)

ジュリア。(嚴かに) そんな事したら、あたしはあなたの



出て行く時に窓から飛下てやるから好い。きつとしてやるから。

チャアテリス。(平氣に)窓は家の後側さ。僕は前側へ出るんだから一向差支なし。左様なら。(月に近づく)

ジュリア。レオナアド可愛相だと思はないの。

チャアテリス。ちつとも。あなたが昔風の御嬢様に逆戻りしてからは、滅茶に嫌になつた。駄々つ兒見たいな眞似をして、泣味噌小説の文句を口走つてる女の癖に、人格の高い利巧な男の友達にならうなんて潜越な事を何だつて考へるんだ。(女は仰山な叫聲を出して)

咽びながら男の胸に纏る。さあ、お泣きでない。ジュリア。泣いたりなんかすると、御機嫌の好い時の半分も綺麗ぢやないから、僕も悲しくなる。さあ、行かう。

ジュリア。(親しげに)参りますよ、そんなにおつしやるなら。一度キスして下さい。

チャアテリス。(當惑して)あんまりだ。そんな事が出来るものか。さあ、行かしておくれ。(女纏りつく)キスしたら文句なしに蹤いて来るんだね。

ジュリア。あなたの云ふ通りになるわ。



チャアテリス。ちや、さあ。(女を抱きて亂暴なキスをする) さ  
お約束だ。行かう。

ジュリア。嫌なキスねえ。昔の様なのをして頂戴。

チャアテリス。(烈しく) ええつ、馬鹿。(男は身體をもぎ放す。

女は苦悶の聲を忍び音に洩して身投げる様に倒れる。男は怒りの眼に女を見やつて室を出て戸を閉める。女は片手をついて體をもたげ男の足音に耳を欬てたが、足音が留ると、誇らしい狡猾な色を顔に浮べた。足音が引返して来るので、又前のやうに體を投げる。チャアテリス再び現はれ、非常に當惑した様子で) ジュリアしくじつたよ。カスバアソンがあ

なたの父上と一所に上つて来る。(女は急に起上る) そ  
ら聞えるだらう。親爺が二人。

ジュリア。(床の上に坐る) そんな筈はないわ。二人はお互  
に知己ぢやないんですもの。

チャアテリス。(失望して) 本當に二人が仲好くして上つて來  
るんだから仕方がない。一體どうすれば好いんだ。

ジュリア。(男の助によりて立ち上る) 早く。昇降機よ。あす  
こから降りられるわ。

チャアテリス。いや、召使が行つちまつたから、昇降機は  
鍵が掛つて居る。



ジュリア。(素早く帽子を結びつけ) ちや、も一階上へ昇りませう。

チャアテリス。上はないんだ。僕達はてつべんに居るんだよ。それよか素晴らしい嘘を見附るんだ。僕はどうも好い智慧が出ない。あなたなら出るよ。ありつたけの智慧をお絞り。僕も後から助けてあげる。

ジュリア。でも——

チャアテリス。しつ。さあ来た。腰をお掛け。平氣な顔を  
して。(ジュリアは帽子と外套を引きちぎつて卓子に投げ掛け、ピアノに突進して腰を掛ける)

ジュリア。此處へ来て、お唱ひなさい。(女「あだし唇」のシム

フォニイを弾く。男はピアノの側に立ち、唱ひ出さんとする様子をつくらふ。二老人登場。ジュリア、ピアノを止める) 年長の方は大佐ダニエル・クレエゲン。峻厳且單純な老將だといふふりをしてゐるが、しかし體格は立派で眞直であるし、性格は實際お人好の衝動的な、すぐ物事を信ずるといふ風であるから、いかに若々しい。軍人及紳士として全く思想に關係のない職業をして来たので、小供らの驚くべき進歩にびつくりして、何かしら自分を教育しやうといふ氣持になつてゐる。その友ジョセフ・カスペアソン氏はグレエスの父で大佐のやうに無邪氣なところは無い。熱烈な理想主義的感情を持つて居る。屢現實を憤慨し遂に習慣的に怒りつばい舉動が出来上つてゐる。



それから話の途中で急に熱情的に變る事がある。  
 二人は表情が大變違つて居る。大佐の顔は氣候、年月、飲食  
 其他精細しい煩に刻み込まれては居るが思想に苦しめられたこ  
 とがないので、まだ何處か活きいきしてゐて、快樂と好奇の豫  
 期に充ち巨つた所がある。カスバアソンの方は倫敦の坐職的な  
 頭腦の仕事に痛めつけられて、慢性の疲勞、休息と清新な情緒  
 とに對する渴望、冒險や快樂に對する幻滅的冷淡(元氣恢復のた  
 めにはさうでもないが)等が現はれて居る。彼の用心深い短氣な  
 眼光、幾重にもなつた頭髮、自分に對する非常な眞面目等は重  
 重しい態度を造り上げて居る。

二人とも夜會服カスバアソンは未だ毛皮靴の外套を脱がない。  
**カスバアソン。** (歓迎の意をれんごるに示して) 止さなくつても

好いよ、ミス、クレエヴン。チャアテリス、やり給  
 へな、(長椅子の後に來て、外套を其上に掛け、オハラグラ  
 スとプログラムをポケットから出してピアノの上に置く。ク  
 レエヴンは其間に爐傍に行き敷物の上に立つ)

**チャアテリス。** いや。有難う。ミス、クレエヴンが今ちや  
 うど古い歌を一つやつて下さつたので、もう澤山で  
 す。(譜をピアノの臺より取り去りて他に置きピアノの蓋を  
 する)

**ジュリア。** (カスバアソンと握手するためピアノとソファの間  
 を通る) どうして父をお連れなすつたの。びつくり致



しましたわ。(クレエヴァン大佐を見る)ま、よくいらつし  
つたわね、お父さま。(窓のほとりの椅子に腰掛く)

カスバアソン。クレエヴァン。これは有名なイブセン哲學者

レオアナド、チャアテリス君だよ。

グレエヴァン。いや、私も近附でね。宅でも親しくして居る。

カスバアソン。それは失禮した。(チャアテリスはピアノの腰掛  
に坐す)此宅でも大變親しくして居るよ。それは兎に  
角、グレエスはどこだらう。

ジュリアとチャアテリス。え——(黙して互に見かはず)

ジュリア。(丁寧に)あら失禮。

チャアテリス。どう致しまして。(白けて沈黙)

カスバアソン。(調停するやうに)グレエスはどうしたつて、

チャアテリス。

チャアテリス。なあに僕は唯あなたがグレエヴァンさんとお  
知己だとは、一向知らなかつたと云はふとしてたん  
ですよ。

クレエヴァン。それは私も今夜迄知らなかつた。随分奇抜だ

よ。偶然芝居で逢つてね、忽ち十年の知己といふわ  
けさ。

カスバアソン。(力強く云ふ)そうだ。わたしはよく家庭生活



が分散すると君に云つてゐたが、これはその證明になるねえ。子供達——グレエスやジュリアなどが離れ難い親友になつて居るのに、昔親友だつた私達は、もし偶然君が隣の柵へ紛れ込まなかつたら一生逢ふ機会がなかつたかも知れないのだ。まあ兎に角掛けたまへ。(熱してクレエヴンに近づき、爐傍の朧つき椅子を薦める) 火の傍があいてゐる。好い時に掛けたまへよ。(長椅子の端に腰を掛け、感嘆の調子にて) 君をよくダンつて呼んだつけな。

クレエヴン。君もジョオオつて云つたね。僕は君がトランプ

イイルドつて云ふのだらうと思つて居たから、一層暗合の奇なるに驚いた。

カスパアソン。あれは娘の性だ。御存じの通り後家だから。時に君は素晴らしく丈夫らしいな。年を取つても一向變らない。

クレエヴン。(忽然怪しげに憂を帯び) 健康に見える。自分でも健康に感じる。所が餘命定まれりさ。

ガスパアソン。(驚く) そんな事を云ひ給ふな。そんなことはないだらう。

ジュリア。(怒り聲に) お父さん。(カスパアソンは怪訝な面持に



て女を見る)

クレエヴン。そうだ、そうだ。こりや悪かつた。不吉な話だ。然しカスバアソンには打ちあけた方が好いだらう。非常に親しい友だちだつた。今もさうだと思ふ。

(カスバアソンはクレエヴンに近寄り黙して手を握る。歸りて長椅子に腰を掛け手布を出し興奮の色を現はす)

チャアテリス。(少しく堪えられぬ態にて) 實はね、カスバアソン、クレエヴンが醫學と云ふ妖術の一種を熱心に信仰してゐるつて理なんです。クレエヴンは最新種の肝臓病の一例として醫學界に有名なものですよ。醫者

がもう一年は持つまいと斷言したものだから、來年の復活祭迄は生きてゐない決心をなすつた。醫者たちを喜ばせるためにね。

クレエヴン。(軍人らしき熱情を以て) さう事もなげに云つて私に元氣を附けて下さる段は誠に有難いが、然し私も時が來れば覺悟をしなければならぬ。私は軍人だ。(ジュリアア啞び泣く) 泣かなくつてもいいよ。

カスバアソン。(嗔聲) どうか永生して貰ひたいものだ。

クレエヴン。後生だからその話はよして呉れ給へ。(立上り、再び爐傍に行きて、火に背き、敷物の上に立つ)



チャアテリス。カスバアソン。無理にも倶楽部へはいるやうにおすすめなさいよ。でないと馬鹿になる。ジュリア。駄目なの。シルヴィアとあたしとで常住勸めて居るんですけど。

クレエヴァン。これ、私には自分の倶楽部がある。

チャアテリス。(嘲笑的に) いかにも。陸海軍青年集會所。しかしあれは倶楽部ですかね。女を一步も踏み込ませないで。

クレエヴァン。(少し激して) 倶楽部は趣味の問題だ。君は鴛鴦倶楽部を好き、私は嫌ふ。しかしジュリアや、未だ

二十にもならぬ妹の小娘などが、半日もあんな所で時を過すのは實に好くない事だ。それに實際名前もあらうにイブセン倶楽部たあ。どうも。そんな所へはいれば世間の物笑ひだ。イブセン倶楽部。さあ、カスバアソン。加勢したまへ。君も無論同意見だらう。

チャアテリス。カスバアソンは倶楽部員ですよ。

クレエヴァン。(驚く) いや、そんな筈はない。今晚だつてすつと、青年の新思想がどんなに萬事を頽廢させてゐるかといふことばかり話してゐたのだ。



チャアテリス。無論。俱樂部で新思想を研究して居るんです。しよつちう彼處に居ますよ。

ガスバアソン。(和かに)そうしよつちうでもない。吹いちやいけないよ君。君も知つてる通りわたしはグレエスのために、まあおやちがゐれば保護にもなるし、また、え——云はゞ一種の是認にもなるといふつもりで加入はして居るが、決して俱樂部を讚めた事はない。

クレエグン。(カスバアソンの曖昧なのを、ぶつきら棒に並べ立てる) うん、そうか。これは案外だ。實際全く案外

だ。今晚の話の模様ちやそうとは思はなかつた。だつて君は女らしい女や男らしい男が自ら進んで犠牲になつたり、尊い苦痛を堪え忍んだりする光景を見ながら生活して来たから、近代的の運動は何もかもいやだと云つたぢやないか。ちや君が女らしい仕打や男らしい行動を見たといふのはイブセン俱樂部でかい。

チャアテリス。無論そうぢやありませんよ。俱樂部の規則ではそんな事は一切禁じてゐます。會員の候補者は、男か女かの會員から推薦されなければならぬので、



其紹介者は、候補者を、女なら、これは女らしくない女だ、男ならこれは男らしくない男だと云ふ風に證明するんですよ。

クレエヴァン。(熱くなつたズボンを冷たい脚に押しつけるため身を屈めながら、嘲笑を浮べる) 駄目だ。そんな淺薄な事をいつたつて私を引入れることは出来ない。

カスパアソン。(聲高に)ほんたうなんだよ。馬鹿げた事だが本當だ。

クレエヴァン。(むかむかとしながら、御尤な推定を初める)ちや何だね、誰かゞジュリアは女らしい女ぢやないといふ

あつかましい證明をしたんだね。

チャアテリス。(陰鬱に)そう云つちまへば聞へがよくありませんね。然しある男が其思ひもよらぬ嘘を進んで引き受けたんです。

ジュリア。そんな風に思つてゐればその男は吞氣でせうよ。でもあたしは何の點が外の方に比べて餘計に女らしいのでせう。シルヴァアの話によると、陰ではいつでもみんながそんな事を云つていらしやるんですつてね。つい此間も委員の一人が云つた相です。あたしは決して會員にはなれない筈だつただけ



ど、あなたが（とチャアテリスに向ひ）密輸入をしたのだつて。私は其方に面と向つて聞いて見たいと思つてるのよ。

クレエヴン。だがね。私は其の人の語が本當でありたいと眞面目に思ふ。お前には最高の敬意を表した語だ。どうもあの倶楽部は狂人のあつまりだね。

カスパアリン。（強く）そうだよ、そうだよ。

チャアテリス。全くです。だからあんなに一粒ゑりなんでしょうよ。評判の動かない確かな人でなければ決して入会しませんよ。倶楽部が方々でほめられるやうにな

れば、それはもう單に倫敦の悪人たちの人格洗濯所になつてしまふ。クレエヴンさん、お這入りなさる方が好い。教育して上げます。

クレエヴン。何だつて。娘を女らしい女ぢやないと證明したやうなそんな悪人の加つてる倶楽部へ這入れつて。私が病人でなかつたら其奴を蹴飛ばしてやるんだが。チャアテリス。そう云つたものぢやない。僕ですよ。それは。

クレエヴン。（譴責の調子）君が。そいつは實に困るねえ。何故そんなことをする氣になつたのさ。



チャアテリス。要求されたんです。だつて僕はカスパーソンをさへ男らしくない男だつて證明しなければならなかつた。倫敦の剛健な感情の代表者をねえ。クレエヴァン。それはジョオには害にならなかつたがね、ジュリアの方は性格に影響した。

ジュリア。(怒りて) お父様。

チャアテリス。それはイブセン俱樂部での事ぢやない。全く反對ですよ。兎に角、何とも致方のない事だ。あなたはどう云ふ理で俱樂部が潰れるか御存じでせう。喧嘩——悪人——鞆當——いつでも女が原因です。

で僕達は俱樂部を創める時これを頭に置いて居た。しかしさう云ふ女はいつでも女らしい女なんだから、働いて、獨立の生活をして、自分ひとりの始末の附け方位心得てゐる女らしくない女なら、そんな心配は一向にない。だから唯女らしい女は入れまいと約束したただけなんです。でもし誰か密輸入をした場合には、その婦人は女らしい態度を捨てなければならぬ、といふことにしました。これが甘く行つてゐるんですよ。(立上り) 明日、御飯を差上げますから、どんな所だか見にゐらつしやい。



カスパアソン。(立上り)いや、わたしと先約がある。然し君  
が此方へ加はれば好いちやないか。

チャアテリス。幾時です。

カスパアソン。十二時過ぎなら何時でも好い。(クレエツン  
に)バアリントン・アアケエドのあつちの端でコオク街  
九十だ。

クレエツン。(書き留める)九十だね。十二時過、と、(急に陰  
鬱になつて)序だが、私のために特別に何も註文しな  
くつて好い。私はアポリナリスなら好いが酒はいけ  
ないんだ。肉も禁じられて居るが魚は折々少し位喰

つてる。先が短かいのに、それさへ愉快な生活ぢや  
ないのさ。(嘆息する)まあ、好い。(元氣を取りなほし)さ  
あジュリアもうお暇しなきやならん。(ジュリア立上る)  
カスパアソン。だがグレエスは一體どこだらう。探して來  
なくちやいけまい。(戸口に行く)

ジュリア。(これを留めて)どうか此儘にお置き遊ばして。

大變お疲れなので御座いますから。

カスパアソン。でも挨拶に一寸位は。(ジュリア、チャアテリ  
ス互に當惑して見合ふ。カスパアソン素早く何か不都合な事  
がある)と合點する)



チャアテリス。どうも、すつかり云つてしまはなければならぬやうだ。

カスパアソン。何を。

チャアテリス。實はね、トランフイイルド夫人はあの通りたいへん考へ深い方でゐらつしやるから、僕が——え、——僕がミス、クレエヴンと特に二人限りで話したがつて居るやうにお取りなすつたんですね。だもんだから疲れたと云つて寝みに行かれたんです。

クレエヴン。(侮辱されて) しいつ。しいつ。

カスパアソン。ほほう。そうか。それぢや好い。あれはそ

んなに早く寝はしないから、一寸連れて來やう。(呆

然たるチャアテリスを後に殘して確信ありげに出て行く)

ジュリア。さあ大變。(圓卓子に馳せ寄り、帽子と外套とを取  
る) 行きますよ。(戸口に行く)

クレエヴン。(驚愕して) 何をするんだ。ジュリア。トランフイイルド夫人に挨拶をしないで行く奴があるか。そんな事をすれば、とほうもない無禮だ。

ジュリア。お父さま、あなた好ければ、此處にいらつしやい。あたしは嫌です。立關で待つて居ますよ。(急ぎ出で行く)



クレエヴン。(女を追ひて) まあ、どうしたつてんだ。(女出

で去る。追蹤を思ひ止まり、チャアテリスにふりむき、不平  
を鳴らす) ね、君。實にこれは醜怪の極だよ、私は斷  
言する。君もジュリアとの事を何から何まで皆の前  
で云つてしまふなんて随分ぶしつだけだね。

チャアテリス。理は明日話しませう。全く今の所は、ジュ  
リアの眞似をして逃げた方が好いやうだ。(戸口に向ふ)  
クレエヴン。(妨げる) 待ちたまへ。おいてけぼりにされち  
や馬鹿を見る。今逃げると實際さつきのことを悪く  
取るよ。

チャアテリス。(譲りて) よろしい、残りませう。(身をもたげ

て、ピヤノの肩のところの掛け、脚をぶらつかせながらおと  
なしくクレエヴンを眺める)

クレエヴン。(あちこちと歩みながら) ジュリアにあんな眞似  
をされてどうも大弱りだ。あれは一寸した事でもい  
じめられるのが嫌だね。あ——辯解をしてやらなく  
つちやならない。實際あれが出て行つたのは此宅の  
人に對しては侮辱だ。カスバアソンはもう怒つてる  
かも知れない。

チャアテリス。なあに、その心配は無用です。トランファイ



イルド夫人が甘く片を付けてくれるから。

クレエヴァン。(冷嘲的に) あゝ、そうだ。奴さんは娘の統御の

出来ぬ御連中だつけ。(元の場所、爐側の敷物の上に行き

火を背にする) それに一體——何とか云つたね——え

えと、「女らしい女や男らしい男が進んで犠牲になつ

たり尊い苦痛を堪えたりする」光景だの、いろんな

そう云ふ運命の中で生活して来たつて云ふのは、ど

う云ふ意味だらう。病院の何かだつたのかな。

チャアテリス、病院。馬鹿云つちやいけません。劇評家で

さ。倫敦の剛健な感情の代表者だと云つてあげたぢ

やありませんか。

クレエヴァン。そうは言はなかつたよ。實際、思ひもよらな

いことだ。しかし唯で芝居に行けるのは愉快だらう。

時々切符を呉れるやう頼んで置かう。だが男子とし

てそんな事を云ふのは少し滑稽だな。カスパアソン

は舞臺上の事を全く眞面目にとつて居るだらう。確

かに。

チャアテリス。勿論。それだから好い劇評家なんです。ま

た、舞臺外の人を眞面目にとるなら、好ましくない

制限の下にある舞臺上の人を眞面目にとらないとい



ふ筈はない。(ヒヤノより飛び下りて窓の所に行く、カスバ  
アソン歸つて来る)

カスバアソン。(クレエヴンに寧ろおつおつと)實はグレエスは  
寢てしまつてね。辯解を君やお嬢さんに、——(ジュ  
リアの方を顧み、居ないのを見て口を噤む)

クレエヴン。(きまり悪げに)ジュリアに就て辯解しなきやな  
らないのはわしだよ。あれは——

チャアテリス。(さへぎりで)ジュリアは、僕たちが出て行か  
ないと、あなたが夫人を無理にも挨拶に起して來ら  
れるだらうと云つて、出て行きました。

カスバアソン。どうも御親切だ。全く恥かしい理だが——  
クレエヴン。なあに。なあに。娘が下で待つて居るから。

(行きかけて)さよなら。チャアテリス、さよなら。

カスバアソン。(クレエヴンを送り出しながら)さよなら。お嬢  
さんによろしく云つて呉れ給へ。あしたの十二時過、  
好いかい。(二人出で行く。チャアテリスは深い溜息を吐き、  
ぐつたりとして爐傍に行く)

クレエヴン。(外にて)よろしい。

カスバアソン。(外にて)階段に氣を附けたまへ。少し急だ



よ。さよなら。(外面の戸を開ぢ、カスバアソン歸つて来る。這入らずに戸口に突立つたまゝ片手を胴着の胸の所に置きチヤアテリスを嚴かに見る)

チヤアテリス。何です。

カスバアソン。(嚴かに) チヤアテリス、一體どうしたと云ふのだ。白状したまへ、是非。グレエスは未だ起きて居たので、私は話して見たが。一體どうしたんだね。

チヤアテリス。あなたの演劇的經驗にお訴へなさるが好い。無論一人の男子――

カスバアソン。(進みてチヤアテリスに面して立ち) ふざけちやいけない。老人をおひやかすものぢやないよ。眞面目に聞くんた。どうしたと云ふのだい。

チヤアテリス。眞面目に話しますが、僕がしたんです。ジュリアが僕に結婚しやうとする。僕がグレエスに結婚しやうとする。僕が今晚グレエスの御機嫌を取りに来る。ジュリア登場。大悶着。グレエス退場。あなたとクレエヴァン登場。託言辯疏。ジュリア、クレエヴァン兩人退場。そして僕達が残つて居る。これでみんなです。こんな事は氣にしないでお休みなさい。



さよなら。(去る)

カスパアソン。(あとを凝視して)よし、わたしも――

第二幕

次の日正午、イブセン俱樂部圖書室、細長き室、兩側の中ほどにガラス戸があつて、一つは食堂の廊下、一つは正面階段へつゞく。室の奥の方中央に爐。華美な爐棚の上にイブセンの塑像とその脚本の名前を裝飾的に印刷したものを飾る。爐の兩側には圓く凹みたる場所(レセツス)、内面の周圍に腰掛、上の方に

窓。腰掛と窓との間は書物棚。長いセテイイ(數人腰掛ける椅子)が爐に面して据えてある。セテイイの背に相接して緑の卓子、其上には雑誌が積み重ねてある。イブセンは正面向で室を見下して居る。イブセンの左手に食堂への戸口があり、それより前面は中央の所に廻轉書架、傍に安樂椅子。イブセンの右手はレセツスと戸口との間に一寸した圖書館梯子が置いてある。「談話を禁ず」としたピラがあちこちに眼につく様に貼つてある。

カスパアソンは廻轉書架の側の安樂椅子により掛つて毎日畫報を讀んで居る。ドクトル、パラモアはイブセンの右手のレセツスの中の腰掛で英國醫事新聞を讀むで居る。彼は職業上から見ては未だ若年だが明白に四十である。額は禿げかゝり、陰鬱な弓なりになつた眉毛は兩方から近寄つて、不愉快な氣持



であるらしい顔附になつてゐる。フロツクコートを着込み、流行の外科醫の臨床的態度を精細いところまで、型にはまつた調子でちよいちよいと出す。全然幸福な開つ放しな人でもないが、又特に不幸な、わざと不真面目な人でもなくて、智的には非常に自足した人である。

シルヴィア、クレエヴンが中央の爐の前のセテイイに腰掛け、てイブセンを読む。頭の後丈が室の中央に見えて居る。年は十八、小さいけれども美しい。氣の利いた仕立屋物の着物を少し裾短にして、ニウマアケット、シャケットを着け、白いブルウズを、なるべく男の胴着や襯衣の前と見えるやうに絹の飾帶、男の襟、時計の鎖などをつけて、出して居る。然しいかにも可愛い姿だ。給仕の子供の聲が單調にドクトル、パラモアを呼びながら右手外より近づく。

給仕。(外にて)パラモア先生、パラモア先生。(室内に入る)

る、産の上に名刺を載せて持て居る)パラモア――

パラモア。(身を舉げて、鋭く)おい。此處だ。(給仕臺を持って来る、パラモア名刺を見る)好し。今に行く、(給仕去る。)

パラモア立上り、レセツスより出て新聞を卓子の上に投げる)今日は、カスバアソンさん。(立留り、カフスを引き出し、衣紋を直ほす)トランフイイルド夫人もお變りはありません。ますまいね。

シルヴィア。(腹立しく頭を振り向け)しつ。しつ。(パラモア驚いて、振り向く。カスバアソンは勢よく立上り書架を越し



て誰かと見やる)

バラモア。(シルヴァリアに、堅苦しく)御免なさい、ミス、クレエヴァン。つい、うつかりして居ました。

シルヴァリア。(赤くなつてきつぱりと)外の人の邪魔になりはしないかつて事を、初め一通りお尋ね下されば、いくらお話しになつても好う御座いますけれど、わたくしの不平なのはわたくしが女だと思つて存在をお認めなさらない事なんで御座います。さあどうぞお喋り遊ばせ。ちつとも邪魔になりは致しません。

(暖爐に向き再びイブセンに一心になる)

カスパアソン。(威厳をつくるつて)お嬢さん、男子ならば私

達が一語二語話をしたつて決して咎めはしませんぞ。

(シルヴァリア知らぬ振をして居る。カスパアソンは憤然として)實を云へばわたしは今バラモア君にお客を此處へ請じてても一向差支はないと云ふつもりでゐたのだ。失敬な。(新聞を椅子の上に投げつける)

バラモア。いやどうも有難う。何あに、機械屋ですよ。

カスパアソン。何か新発見でもありましたかな。

バラモア。はあ、折角のお尋だから云つてしまひませう。多分非常に重大な発見だらうと思ふのです。僕はこ



れまで閑却されてゐた天竺鼠の肝臓中の小管を發見したのです。ミス、クレエヴンもお父様の病氣を大變はつきりさせることなのだから、この話は許して下さいませう。先づ第一に此導管が何の爲に存してゐるかを窮めなくちやあならないんです。

カスバアソン。(謹んで、科學其者に相面したやうな心持) ほほう、でどうなさるな。

パラモア。何あに。わけはありません。その導管を切り放して見て、天竺鼠がどうなるかを試験すれば好いんです。(シルグアイア驚いて立上る) で特に其目的のため

に造られたナイフが要りますので、下に待つてゐる男は、其ナイフを實驗所へ廻して使用する前に驗してみても呉れといふので少し許り持つて來たんです。それ云ふ凶器を此處へ持込む理には參りませんからね。シルグアイア。パラモア先生。其んな事をなすつたら委員へ苦情を持込みますよ。會員の大部分は解剖反對黨です。恥つて事をお知り遊ばせ。(左手階段へ通じる戸から飛び出す)

パラモア。(抑壓したる嘲笑を以て) 解剖反對なんて事は今日科學的人士の廢さなければならぬ事です。無智、



迷信、感情、皆同一だ。天竺鼠の幸福を全人類の健康と生命よりも重大視して居る。

カスパアソン。(聲高く)それは無智でも迷信でもない。正しくイブセニズムだ。イブセニズムの真相だ。私は午前中火の傍でゆつくり坐つて居るつもりだったが、あの娘にはまだこれ迄逢ふ機会がなかつたのでね、それであの傍へ坐るのは気がひけましたよ。どう取られるか解らないから。これも女を倶楽部に入れる樂の一つさ。女の奴は誰でも此處へ這入つて來ると先づ火の側へすわつて塑像を讚めたがる。私は時々

火箸で以てあの鼻をこすつて遣り度なる事があるよ。  
 パラモア。私はミス、クレエヴンは姉さんの方が好いと  
 思ひますね。

カスパアソン。(眼を輝かせて)あゝ、ジュリアか。御尤も、  
 素破らしく美しい女だ。頭の先から爪の先迄女に出來  
 てる。イブセニズムなどは毛程もない。

パラモア。全くですわね。え——それからあなたはミス、  
 クレエヴンがすつかりチャアテリスに參つてるとお  
 考へになりますか。

カスパアソン。彼奴か。あれぢやない。先生あの女を追掛



けて居るが、女の方が過ぎものだ。あゝいふ女は強い男らしい頸の太い恰幅のがつしりした男を好くものだ。

バラモア。(心配げに)ほほう。ちや狩好の人ですね。

カスバアソン。いやいや、そうぢやない。まあ科学者さ、

君のやうな。だが私の云ふ意味は——男子、さ。(うんと自分の胸を音する様にうつ)

バラモア。無論です。でもチャアテリスだつて男子ですよ。

カスバアソン。此奴は。君は私の云ふ意味が解つて居ない。

(給仕再び臺を持って入つて来る)

給仕。(單調に呼ぶ)カスバアソンさん。カスバアソンさん。カスバア——

カスバアソン。おい。此處だ。(臺から名刺を取り)此處へお通し申して呉れ。(給仕去る)クレエヴンだ。私とチャアテリスとで會食する筈になつて居る。君も外にする事が無ければ機械屋の用事を濟ませてから來給へ。ジュリアが來たらあれも引張らう。

バラモア。(喜びの色に頬を染めて)それは結構です。どうも有難う。(階段の戸を出やうとすると、クレエヴン入り来る)



今日は。クレエヴァン大佐。

クレエヴァン。(月口で)今日は。御機嫌よう。カスバアソンは居ますか。

パラモア。(にこにこして)え、其處に。(出て行く)

カスバアソン。(熱心にクレエヴァンを迎へて)御機嫌好う。さてすぐ喫煙室へ行くか、それとも此處で話しながらチヤアテリスを待つか。連中が好きなら喫煙室は婦人で一杯だ。此處なら三時頃迄獨占が出来る。

クレエヴァン。女の喫煙は嫌なものさ。此處で緩くりしやう。(右手安樂椅子に腰を掛く)

カスバアソン。(其左側の椅子に腰を掛く)私も嫌だ。此俱樂部

部ちや何の室へ行つてもゆつくりと一服やるつてわけに行かない。直ぐ女が遣つて来て紙巻をいちくり初める。女には嫌な習慣だね。實に不自然だ。

クレエヴァン。(嘆息して)あゝ、ずつと前に二人でモオリイ、イブデンの所へ通つた時に較べりや、随分變つたねえ。わしはあの時立派に負けた。そうだらう。ねえ。

カスバアソン。(熱心に讚める)そうだよ。あれはたびたび私のいゝお手本になつた。全くだよ。

クレエヴァン。うん、君はいつでも理想のホオムを確信して



居たつけな。眞正なる英國の夫人と幸福な清い團欒さ。モオリイはどうなつたい。

カスバアソン。(モオリイに好意を持つやうに努めつゝ) まあ、悪くもない。もつといけないうらうと思つて居た。君も知つてる通り、あれの親類筋には閉口したね、みんな下郎なんだから。それにわたしの母と合はなかつた。その内あれは都會生活を嫌ひ初めたがわたしは職業の關係で都會を離れる理に行かない。それでも別れる迄は世間並に随分説いたものさ。

クレエヴン。(驚きて) 別れた。(押へ切れぬ程興味を起す) へえ。

それが理想のホオムの末路かい。

カスバアソン。(和かに) でも私の罪ぢやない。(感情的に) 何時かはどれ程私があれを愛してたかといふ事が解るだらう。しかしあれは眞の男の愛を尊重する事が出来なかつた。君、あれは常住寧ろ君に結婚した方が好かつたと云つて居たよ。

クレエヴン。(この語で眞面目になり) おい、おい、君。まあなる様になつたんだから好いちやないか。時にわたしの結婚の話も聞いたらうね。

カスバアソン。聞いたとも。誰だつて知つてる事だ。



クレエヴァン。ちやあ、序にみんな打ちあけやう——誰でも

知つてる事だ。わしは黄金のために結婚した。

カスパアソン。(勵ます調子)それがどうしたつて。え。金がなくちや生きられないぢやないか。ねえ。

クレエヴァン。(眞面目な感情を以て)だが、やがて私は非常に妻を愛するやうになつたよ。あれが死ぬまでホオムを續けてゐた。しかしもう今は何もかも變つてしまつたねえ。ジュリアはしよつちう此處に居るし、シルヴァアは性質は違ふが矢張りしよつちう此處に来てゐる。

カスパアソン。(同情して)そうだよ。グレエスも同じだよ。

しよつちう此處へ来てゐる。

クレエヴァン。そして今度はわしに毎日此處へ来いと云ふのさ。二人で毎日加入しろと勧める。不平を鳴らすのを止せといふ理なんだらう。これを君に相談したいのでね。實際加入する必要があるだらうか。

カスパアソン。そう、もし厭でなければ——

クレエヴァン。(性急に遮りて)主義としては無論こんな物はいやだ。しかし、いやだと云つた所で何になる。俱樂部は依然として存在してゐるさ。そしてまた其中に



何か好いところがあれば利用したつて一向差支はな  
い。

カスパアソン。(なだめて)無論そうだ。がまあ、實を云へば、  
そんなに不都合な場所でもない。宅に居りや家丈は  
自分のものだ。家族を自分の物にしやうと思へば此  
處で食事を共にするより外はない。

クレエヴァン。(あまり感服もしない様子) 全くだ。

カスパアソン。また、嫌なら、何も一所に食はなくとも好  
い。

クレエヴァン。全くそうだ。しかし亂暴な風がありはしない

かい。

カスパアソン。いや、別にそんな事もない。無論、女が煙  
草を吸つたり自活をしたりつて風だから、倶楽部の  
調子は低い方だが、しかし特に好くない所もないや  
うだ。また實際、便利でね。(チャアテリス、兩人を索れ  
ながら入り来る)

クレエヴァン。(立上り)ねえ君、わしは大變入會し度なつた。  
どんな風だか見やうと思つて。

チャアテリス。(兩人の間に來て)兎に角そうなさい。あんま  
り早く來てお話の邪魔にはなりませんでしたか。



クレエヴァン。いや別に。よく来て下すつた。(握手す)  
 チャアテリス。それは好かつた。來るのが考へてたより早  
 くなりましてね。實は少しさしせまつたことでカス  
 バアソンとお話したので。  
 クレエヴァン。秘密に。

チャアテリス。別段そうでもありません。(カスバアソンに)

唯だ昨夜お話しした事に就て。

カスバアソン。ちや、秘密だ。秘密にすべき事だ。

クレエヴァン。(直ちに卓子に退く)わしは一寸タイムスを――

チャアテリス。(とゞめて)いえ秘密ちやありません。倶楽部

では皆推測してゐる事です。(カスバアソンに)グレエスは  
 僕に結婚したいつて事を未だ云ひ出しませんか。

カスバアソン。(憤然と)いや、君があれに結婚したがつてゐ  
 つて事は云つた。

チャアテリス。ははあ、しかし僕の要求ではなくグレエス  
 の要求なんです。これはあなたには重要な事ですよ。

クレエヴァン。(少し驚きて)失敬だが、君、これは内證事だ。

わしはあちらへ行かう。(再び卓子の方へ動く)

チャアテリス。一寸お待ち下さい。あなたも關係してゐる事  
 です。ジュリアも僕に結婚を申込みましたよ。



クレエヴン。(烈しく争ふ調子) 實際どうも。決してそんな答はない。

チャアテリス。慥かに事實です。昨夜彼處にトランフイイルド夫人が居ないで僕達二人だけ居たのは、變に見えたでせう。

クレエヴン。見えたとも。でも君が説明して呉れたちやないか。實際君、ジュリアの前であゝ云ふ事をやるのは實に悪い好みだよ。

チャアテリス。なあに、上等な、脂の載つた、滋養的な、飛びつ切りの嘘でさ。

クレエヴン及カスパアソン。嘘だ。

チャアテリス。氣が附かなかつたんですか。

クレエヴン。いや、全く。君は。ジヨオ。

カスパアソン。いや、ちつとも。あの時は解らなかつた。

クレエヴン。此上はもう君を信用しない。こんな事は君に云ひたくはないが。然しあの時だつてジュリアが側にゐて反對しなかつたぢやないか。

チャアテリス。したくなかつたんでせう。

クレエヴン。ではわしの娘がわしを欺いたといふのだね。

チャアテリス。わたしに對する遠慮で仕方なしにそうした



のです。

クレエヴン。(真面目な調子になりて) おい君。君は二人の父親の前に立つてゐると云ふ事を心得てゐるのかい。  
 カスパアソン。そうだよダン。そうだと。私もそれが知りたいたんだ。

チャアテリス。え、あんまり永く二人の娘の板挟みになつてゐたので、未だ少し眩惑の氣味だけれども、なかに此處で辛抱が出来るでせう。(カスパアソン不快な叫聲を發して飛び退く)

クレエヴン。チャアテリス、君の態度は甚だ遺憾だ。(画面

を背ける。突然むかむかとしてチャアテリスに振り向き) よくも君はわしの娘が結婚を申込んだなど、云へるね。娘にそんな心を起さした君は一體何だ。

チャアテリス。全くです。あのかたにしてはこれ位悪い好みはありません。然しあの方は理窟には耳を傾けない。僕は自身で父親のやうな口を聞きましたよ。本當に。あなたの云ひそふな事はみんな云つたんだが、駄目です。僕を捨て、は呉れない。僕の云ふ事を聞かない位だから、どうしてあなたなんかには耳を借すものですか。



クレエヴン。(むしやくしやして)こんな文句を聞いた事があ  
るか。カスバアソン。

カスバアソン。 どうして、どうして。

チャアテリス。 あゝ面倒だ。 さあ、そんな古いコンベンシ

ヨナルが親爺の眞似をなさるな。眞面目な問題だ。

此の手紙を御覽なさいよ。(手紙と端書を出す)此れは

(端書を示して)グレエスです。——序ですがカスバア

ソン、娘御さんに端書を使はないやうに注意してを

いて下さい。この青色は眼に着きやすいからジュリ

アが反古籠を捜して紙片を継ぎ合せる時大變助けに

成る。 さあ、お聞きなさい。「親しきレオナルド。い

くら何となさつても、昨夜のやうな所を見せられる

のは到底堪へられません。ジュリアとの間を昔に返

してわたくしをお忘れ下さいまし。 さよなら。グレ

エス、トランフィイルド。」

カスバアソン。(赫となつて)馬鹿。

チャアテリス。(クレエヴンの方に向いて手紙を讀まうとする)此

度はジュリアです。(大佐は驚愕を豫想して、チャアテリ

スより面を背けるため、外方を向き、しつかりするため椅子

を握る)「なつかしき御方へ。私はどうしてもあの變



な女があなたを横取りしやうとは思へないのよ。初めて逢つた時分に下さつた手紙を二つ三つ送るから、どうか読んで頂戴。そうすれば昔の事を思ひ出すでせう。あなたが、あたしに冷淡になる位、變つて了ふといふ事はどうしたつて無いわ。誰か一寸あなたをそんな氣にさした所で、あなたの心はあたしのものです。——云々、大抵こんなものです。——「さよなら。あなたのジュリアより。」(大佐は椅子の上にくづほれて、手で顔を蔽ふ)これが眞面目だと思へますか。かういふ手紙を日に三度宛寄越すのですよ。(カスバ

アソンに)グレエスは全く眞面目です。確かに。(端書を突出し)例の青い端書だ。此度は反古籠も當にならない。(爐傍に行き火中する)

カスバアソン。(近寄つて腕組のまゝ顔を合はせる)失禮だがチャアテリスさん。此れはまた新らしい戯談なのかい。

チャアテリス。(自分の事に夢中になつて、他人にどんな結果を及ぼしたかに氣づかぬ)馬鹿をおつしやい。こんな場合に戯談が云へますか。あなたはあんまり新らしい戯談だの新らしい女だの新らしい何だ彼だと頭へ詰め込み過ぎて、固有の古いアダムと混雑になつたもの



だから、少し頭が變になりましたね。

カスパアソン。(嚴格に)君は、國家の光榮ある職務に力をつ  
くしたこの老人の晩年を、どんなに傷けたか氣が附  
かないのかい。

チャアテリス。(クレエザンを見て、其苦痛を眞面目に了解し驚く)  
どうも濟みません。そう氣にしちやいけない。(クレ  
エザン頭を振る)實際大した事ぢやないんです。僕に  
はしよつちう起る事です。

カスパアソン。君には辯解の道が唯つた一つある。君の行  
動に就ては全然責任が君にある理でもないのだ。君

は世間並の近代人のやうに神經衰弱に罹つて居る。

チャアテリス。(驚きて)へ、え。どう云ふんです。

カスパアソン。説明はしない。君も好く知つてゐる筈だ。

わたしはこれから下へ行つて晝飯を誂へる。三人前  
誂へるのだが、一人はバラモアで、君ぢやないよ。

(食堂へ通じる戸口より出て行く)

チャアテリス。(クレエザンの肩に手を置き)さあ、忠告して下  
さいな。あなたはかう云ふ苦しい羽目に落ちた事がある  
のでせう。

クレエザン。君、男の方から申込をしたんでなくちや、女



つてもものはあんな手紙を書くものぢやないよ。  
 チャアテリス。(愁傷げに)大佐。あなたは殆んど世間と云ふ  
 ものを知らないんですね。新らしい女はそんなもの  
 ぢやありませんよ。

クレエヴン。わしには極く舊式な忠告しか出来ない。新ら  
 しい女と關係するまでには古い女との關係を経つて  
 置き給へよ。君が今わしに打開けたのは實に残念だ。  
 わしが死ぬまで待つてありや好かつた。そんなに永  
 い事でも無いのだから。(再び首垂れる。ジュリアとバラ  
 モア階段の方より入り来る。ジュリアはチャアテリスを見る

と立留る。顔は曇り胸は動悸をうつ。バラモアは大佐の著し  
 く悪い状態を見て臨床的態度を極度に現しながら急ぎ近寄る  
 チャアテリス。(ジュリアを見て)やあ。(廻轉書架の陰に退く)  
 バラモア。(大佐の手をとつて脈を數へ初め同情的に)御免なさ  
 い。

クレエヴン。(見上げて)え。(手を引きこめ、寧ろ意地悪く立上  
 る)なあに、今は肝臓の事ぢやない。内證事だ。(ジュ  
 リアとチャアテリスとの間に鬼ごっこが始まる。兩人は、舉  
 動の眞の目的が他の人に解らぬ様に動かなければならないの  
 で非常に興奮してゐる。チャアテリスが初め階段への戸口へ



向ふと、ジュリアは退いて道を遮る。チャアテリスは廻轉書架を廻つて引返すとたんに書棚をぐるぐると廻轉させて他の戸口に向ふ。ジュリアは追掛けて室を横ざる。殆んど逃れやうとする所をカスパアソンが入つて來たので邪覓される。ふり向くとジュリアが追つて居る。他には何にもないのでイブセンの左手のレセツスに入る。

カスパアソン。今日は、ミス、クレエヴン。(握手する) 晝飯を一所にやりませんか。バラモアも來る。

ジュリア。有難う。結構でムいます。(目的なしの様に裝つてレセツスに歩を移す。チャアテリス殆んど袋の鼠にならう

として、石炭欄を越え火箸等を蹴飛ばしながら他のレセツスに行く)

クレエヴン。(ぐるぐる廻れる書架へ行きこれを止めて) 何をして居るんだ。チャアテリス。

チャアテリス。なんにもやつて居ません、この室は随分ごたごたしてゐましてね。

ジュリア。(冷かす調子) え、それでせうよ。(階段への戸口を護るため行かうとする) カスパアソンが腕を組まうと申出る)

カスパアソン。行きませんか。

ジュリア。いゝえ。本當によろしう御座います。お存じ



でございませうけれど婦人を優待するのは倶楽部の規則に反しますので。戸口に一等近いものが先へ参るんでございます。

カスパアソン。よろしい、よろしい。そうおつしやるなら。さあ、諸君、イブセン式に會食をやらう。無性式に。〔出て行くパラモアは丁重な診察室的哄笑をなし其あとに睨いて行く。クレエヴンは最後になる〕

クレエヴン。〔戸口で静かに〕さあ、ジュリア。

ジュリア。〔やさしく〕え、お父さま。たゞいま。お待ちにならなくつても好いのよ。すぐ参ります。〔大佐隣

踏す〕好いのよ、お父さま。

クレエヴン。〔非常に沈着に〕ぐずぐずしちやいけないよ。〔出で去る〕

チャアテリス。僕も行かう。〔戸口に突進する〕

ジュリア。〔飛び掛つて腕を捕へ〕此方へはゐらつしやらないの。

チャアテリス。いやだ。お放しよ、ジュリア。〔放さうとする、

女は放さない〕放さないと怒鳴るよ。

ジュリア。〔責めるやうに〕レオナアド。〔男はもぎ放す〕まあ、よくそんなに荒々しく出来るのねえ。あたしの手紙



は受取つて。

チャアテリス。焼やいつちまつた。(女はぎくとして、顔を背け手で蔽ふ)あれのも一所に。

ジュリア。(急に振り返り)あれつて。あの方も書いたの。  
チャアテリス。え、——あなたのために切れて呉れつて。  
ジュリア。(眼を輝せて)あ、。

チャアテリス。嬉しいのかい。馬鹿。これであなたに對する好意はすつかり無くなつた。(行かうとしてふりかへるとシルヴァイアが歸つたので邪覓される。ジュリアは身を交して、立ちながら卓子から取上げた新聞を讀む振をする)

シルヴァイア。(開放した態度) おや、チャアテリス。どうして。(親しげに腕を執り、共に歩み來る)今日、グレエス、トランフイイルドに逢つて。(ジュリアは新聞を取落し一歩近いて耳を傾ける)あなたは大抵あの方のある所を知つてゐるわねえ。

チャアテリス。もうこれからは知らないよ。シルヴァイア。  
喧嘩しちやつたから。

シルヴァイア。シルヴァイアだつて。俱樂部ではシルヴァイアぢや無いつて事を幾度もいく度も云つたぢやありませんか。



チャアテリス。忘れて居た。失敬々々、クレエヴン、悪戯

小僧。(肩を敲く)

シルヴァア。其の方が好いのよ。ちつと云ひ過ぎたけれど、好いの。

ジュリア。馬鹿な真似をおしでない。シリイ。

シルヴァア。どうか氣を付けて下さい、ジュリア。こゝではあかし達は會員だけれど、姉妹ぢやないのよ。家族だからつてあかしはあなたに對して勝手な真似をしないから、あなただつて少しは遠慮して下さい。

(セテイイに行き、以前の場所に腰を掛く)

チャアテリス。さうだ、さうだ。クレエヴン。姉の専制を

打破せよ。

ジュリア。あたしをだいに使つてまでおたんちんを仕立て上げてるのよ、あなたはもつとましたなことをなさい。

チャアテリス。(卓子の端に腰掛けて) ランチが冷えるよ。ジ

ユリア。(ジュリア、いらいらとして出で去らんとする時、

カスバアソンが食堂への戸口に現はれたので、喚留められる)

カスバアソン。何うしたんです。ミス、クレエヴン。お父さまが大變心配しておいでなさる。皆なも待つて居



ますよ。

ジュリア。有難うございます。今も注意されたばかりな  
んで御座います。(ぶんぶんしてカスバアソンの側を通つて  
出て行く。シルヴァア見廻す)

カスバアソン。

(先づ女を見送り、次にチャアテリスを見る) 神経  
衰弱がひどくなるね。(女のあとを追ふて行く)

シルヴァア。

(セタイイの上に立膝して、セタイイの背越しに話  
す) どうしたの。チャアテリス。ジュリアがあなた  
に云ひよつて。

チャアテリス。(肩越しに) い、え。グレエスを妬いてるのさ。

シルヴァア。い、かげんになさいよ。あなたは随分女たら

しの悪黨よ。

チャアテリス。(冷静に) あなたは自分の親位な年の人にと  
んな風にして話すのが、好い倶楽部の風だと思ふのか  
い。

シルヴァア。(呑込んで) あ、あたしはあなたを了解して、

よ、お坊ちゃん。

チャアテリス。ぢやあなたは僕がどんな女だつて特別に可  
愛がるやうな事のないのは知つて居るだらう。

シルヴァア。(考へつゝ) ねえ、レオナアド。あたし本當に



あなたを信じてるの。あなたが誰か一人の女に特別に氣を引かれるなんて思へないの。

チャアテリス。だから誰でも特別に粗略にはしない——と云ふのだね。

シルヴァ。それぢやいけなくなつちまうわ。あたしの云ふのはね、相手が女だつて事を氣にしないで、話をする時もあたしや外の男にすると同じ様な態度をとる事よ。これが成功の秘訣ね。そんな風にされると皆んなが、女として相當な敬意を拂つて貰はうと思つて氣を病むで來るのよ。それがあなたには解らな

いのでせう。

チャアテリス。あゝ、ジュリアにそれ丈の智慧があるとな

あ、クレエヴン。(嘆息しながら卓子を下り、沈思しつゝ、梯子に倚つて休む)

シルヴァ。ジュリアには樂觀が出来ないのよ。ねえ、そうでしよう、おちさん。でも遠慮なくあいそづかしをおやんなさいよ。一寸した悲劇位堪へるわ。あたしのうちで大變な不幸のあつた時なんかさうでしたもの。

チャアテリス。不幸つて何さ。



シルヴィア。父さまがバラモア病だと解つた時よ。  
 チャアテリス。バラモア病。へえ、バラモアがどうした  
 つて。

シルヴィア。バラモアが罹つたんぢやないのよ。発見した  
 のよ。

チャアテリス。肝臓一件だね。

シルヴィア。え、あれでバラモアがすつかり有名になつ  
 たのよ。父さんは時々悪くなるけれどね、あたし  
 たちは一つは印度で勤めて居らした、め、一つは  
 あんまり大食だからだと思つて居たの。前にはよく、

どつさり平げたものよ。それでバラモアが肝臓の中  
 に小さな恐ろしい微菌を発見する迄はどの醫者にも  
 病氣が解らなかつたのですつてね。肝臓の一寸四方  
 の中に四千萬も居るつてんですもの。バラモアがそ  
 れを発見して、今ちや凡ての人が種痘と同じ様にう  
 えられる必要があるつて断言してゐるんですつてさ。  
 でも父さんには間に合はないんでせう。だから嚴格  
 に食用心をすると二年位命が延せると云ふ外に策が  
 ないんですつて。可愛相に。禁酒して、其上肉が食  
 べられないの。



チャアテリス。でも馬鹿に丈夫に見えるぢやないか。

シルヴァア。え、だから前にはもつともつと丈夫だったの。でも黴菌が遅いながらも着々と働いてるから来年になるともう駄目なの。可愛相に。こんな姿勢をして、この話をしちやあんまり思ひ遣りが無さ過ぎるわ。普通に坐りませう。(セテイイから出て来て書架の傍の椅子に掛ける)あたしは父さんが何時迄も生きて居てパラモアの鼻をあかせてやると好いと思ふの。あの人はきつとジュリアをラブして、よ。

チャアテリス。(興奮して立上る)ジュリアをラブして居る。

希望の光だ。本當だね。

シルヴァア。本當らしいの。あの人が何故今日綺麗な新調のコットやタイを着けて、患者を見にも行かずに俱樂部でぐつぐつして居るのか御存じ。あのランチをジュリアと一所にすればもう澤山。こゝへ歸つてくる迄にはきつと父さんの同意を求るから。——きつとよ。三倍で賭するわ。何で、も好いから。

チャアテリス。手袋で。

シルヴァア。いゝえ。ジガレットで。

チャアテリス。よろしい。だが女の方でどう考へるだらう。



男をとこに嬉うれしがらせを云いふか知ら。

シルヴァア。勿もちろ論ろんよ。外ほかの女をんなに取とられない丈だけにはしてよ。

チャアテリス。成なる程ほど。解わかつた。さ、聞きいて下ください、哲てつ學がく者しゃ

として話はなすから。ジュリアは凡すべての人ひとに對たいして嫉しつと妬とを持つて居ゐる——凡すべての人ひとに。もしあなたがパラモアに對たいして氣きがあり相あひまに振ふる舞まつたら、直すぐあの男をとこを尊そんちよう重じゆうする様やうになる。ね。クレエヴン、一ちよつと寸ほく僕ぼくのため

に芝居しばいして呉くれない。

シルヴァア。(立た上あり) まあ、恐おそろしい人ひとねえ。恥辱はぢよ。で

もイプセン黨たうの仲間なかまのためなら仕方しかたがないわね。そ

の心算つもりで居ゐませうよ。でもグレエスにそれをさせた  
ら一層そう有効いうちうぢやないの。

チャアテリス。そう思おもふ。ふむ。そうかも知しれない。

給仕じよしの子供こども。(前まへの如ごとく外ぐわいにて) パラモア先生せんせい。パラモア先生せんせい。

シルヴァア。あの子供こどもの聲こゑをも少すこしどうかしなきや、俱く樂らく

部ぶの辱はぢだわ。(シルヴァアはイプセンの左手ひだりてのレセツスに這

入いる給仕、英國醫事新聞えいこくいじしんぶんを持って入り來きる)

チャアテリス。(給仕じよしに) パラモア博士はかせは食堂しょくどうだ。

給仕じよし。有あり難がたう御座ございます。(將まさに食堂しょくどうに行いかうとするのをシル

ヴァア飛とびつく)



シルヴァア。これつ。それを何處へ持つてくの。此室の備  
附ぢやないか。

給仕。これはバラモア博士の特別の御註文です。お嬢さ  
ま。英國醫事新聞は常に到着後直接あの方の所へ持  
つて行く事になつて居ります。

シルヴァア。まあ何つて事だらう。チャアテリス。こんな  
ことは主義に従つて差留めなければいけないでせう。  
チャアテリス。いや。主義なんてものはあなたを穢なくす  
る最もあはれな原因だよ。

シルヴァア。イブセン。

チャアテリス。(給仕に) 早く行きな。バラモア博士は息を  
切らせて待てらあ。

給仕。(真面目に) 本當でムいますか。(急いで行く)

チャアテリス。あの子供はこの國ぢやあ出世するよ。戯談

氣がないから。(グレエス入り来る。便利な事務的な着附。

自分の氣持や目的に適ふやうに仕立てゝある。流行などには  
一寸も頓着してない。しかし、無論、自分の恰好に釣合ふ様  
に注意はしてある。習慣的に忙がしい人のやうに元氣よく入  
り来る)

シルヴァア。(馳せ寄り) とうとう来たのね。トランファイイ



ルド。おばちゃん。一時間許りも待つてたのよ。餓死しそうだったわ。

グレエス。あゝ。好いのよ。(チャアテリスに)私の手紙はお受取になつて。

チャアテリス。えゝ。あの青い端書は止して貰ひたいもんですね。

シルヴァア。(グレエスに)兎に角下へ行つて卓子を用意しときませうか。

チャアテリス。(グレエスの先を越して)そうなさい。悪戯つ子。シルヴァア。あんまり永く待たせちや嫌よ。(食堂に行く)

グレエス。で。

チャアテリス。昨夜のあとだからあなたに逢ふのは面目ないな。あんな嫌な慕はあつたものぢやない。あんな事のあとでは僕を見るだけでも嫌になるだらう。

グレエス。いゝえ。

チャアテリス。嫌になる筈だ。うつ、醜體だ——侮辱だ——亂暴だ。あなたを幸福にしやう——僕に不幸にされたと云つてゐる大勢の女の中で唯一つの例外にしやう、といふ計畫の結構な終局だ。

グレエス。(快く腰を掛く)あたしはちつとも不幸ぢやあり



ませんよ。嫌な心地にはなつたけれど、プロオクン、ハートにはなりませんわ。

チャアテリス。そうさ、貴君のハートは完全に出来てるから、捻られる毎に泣いたりわめいたりはしないさ。だから僕に適して居る唯一の婦人なのだ。

グレエス。(首を振り)今はそうちやありませんよ。これからも決して。

チャアテリス。決して。何う云ふ意味さ。

グレエス。語丈の意味よ。

チャアテリス。また騙された。僕のラヴする女の浮気はち

ようど僕にラヴする女のしぶとさと同じだ。は、あ。解つた。昨夜の嫌な幕が忘られないのだね。たつた二日前にキスしたのだとあの女が云つた。ねえ。

グレエス。(せき込みて立上る)本當ぢやないの。

チャアテリス。本當。いゝえ。飛びつ切りの嘘さ。

グレエス。あゝ、嬉しい。わたしが本當にいやだつたのはあれ丈なの。

チャアテリス。その爲に云つたんだらうよ、きつと。よく氣にして下すつた。可愛い子。(手を捕へて胸に押し附ける)



グレエス。 あら。 もう何もかも破れつちまつたんぢやありませんか。

チャアテリス。 え、え、え。 僕のハートはあなたの手の中にある。 お破んなさい。 僕の幸福を窓から打遣つて御覽なさい。

グレエス。 まあ、レオナアド。 あなたの幸福は本當にあたしの上に掛つて居るの。

チャアテリス。 (優しく) 絶對的に。(女は喜びに眼輝く。 それを見て男は突然嫌厭の色を顔に現はし、後退りしながら手を垂れて叫ぶ) いや、いや。 何故僕は嘘を云はなきやならな

いんだ。(腕組して断乎と) 僕の幸福は自身にのみ掛つて居る。 あなたがなくても済むことは済む。

グレエス。(自ら勵まして) そうでせう。 好く本當の事を云つて下すつてね。 ぢやあたしもほんとうの所を申しませう。

チャアテリス。(恐れて、腕組を解きつと) いや、それだけは許してもらひたい。 哲學者として他人に眞理を語るのには僕の仕事だが、他人から聞かなくても好い。 嫌だよ。 害になる。

グレエス。(静かに) それはたゞね、あたしがあなたをラヴ



してゐるつてこと。

チャアテリス。あゝ、それなら哲學的眞理ぢやない。幾度なりとも好い丈被仰い。(兩腕にグレエスを抱く)

グレエス。ええ。でもあたしは進歩した女ですよ。(男は手を停めて驚愕の内に女を見る) 父の云ふ新らしい女ですよ。(男は女を放して、凝視る) あたしは全然あなたの思想に賛成します。

チャアテリス。(悪々しげに)それは尊敬すべき婦人が口にするには御結構なことだよ。氣恥かしい筈だ。

グレエス。あなたはその思想を眞面目に考へてはいらつ

しやらないけれど、あたしは全く眞面目です。あたしはあんまり深く愛して居る方と結婚はしません。結婚すればその人に大變な利益を與へて、すつかりその人の力で自由にされる理ですもの。新らしい女といふのはこんな者でござりますよ。これで好いんですか。哲學者さん。

チャアテリス。哲學者と人間とは恐ろしく睨みあつてゐる。然し哲學者はそれで好いと云ふ。

グレエス。あたしもそう思ふの。だから別れなければならぬでせう。



チャアテリス。決してそうぢやない。貴女は是非誰か外の  
人と結婚する。僕は遣つて行つてあなたと戀を味ふ。  
(シルグイア歸り来る)

シルグイア。(戸を開け放して) さあ、ゐらつしやいつてば。

あたしは餓死しさうよ。

チャアテリス。僕もだ。好ければ一所に頂かう。

シルグイア。さうだらうと思つた。スープは三人前誂へて  
よ。(ケレエス出て行く。シルグイア、チャアテリスに向ひ言  
ひ續ける) あたしたちの卓子からバラモアも見えるの  
よ。醫事新聞を讀む振をしてるけれど、きつと飛込

む決心の最中なんですよ。神經が興ぶつて眞青にな  
つてるの。(出て行く)

チャアテリス。甘くやらしたものだ。(後を追ふて入る)

第三幕

同前の圖書室。十分後。ジュリアは怒り且萎れて食堂の方よ  
り入り来る。クレエヴン従ふ。女は苦しげに室を横ぎつて椅子  
に身を投げ掛ける。

クレエヴン。(堪えられぬ態にて) どうしたんだ。今日は誰も  
彼も狂人になつて居るのか。突然卓子から立上つて



あんな風にして遣つて来たのはどう云ふんだい。またバラモアも新聞を讀んでゐて、話掛られても返事さへしない。(ジュリア、堪らなさそうに悶える) さあさあ(と優しく) 好い兒だからお父様に、(腹立しく) どんな悪魔が皆を苦しめて居るのか聞かせてお呉れ。ね。確りおしよ、カスバアソンが来るから。勘定を済まして居るのだから、直ぐ来る。

ジュリア。もうもう辛抱が出来なかつたの。あゝ。三人で一所にランチの卓子について、笑つたりお喋舌したり嘲弄したり。も少しで、あたしは聲を立てたか

も知れないわ——ナイフをとつてあの人を殺したかも知れないわ——あたしは——(カスバアソンは勘定書を手にとって出て来る。近寄りながら胴着の隠しへ押込んだ。入るとから直ぐ口を開く)

カスバアソン。どうもお粗末さま。君が少し許の豆を突ついてソオダ水を飲むで居るのを見ると、がっかりするよ。よくも生きて居られるこつた。

ジュリア。本當に何時でもあれなんでございますよ。カスバアソンさん。それを兎や斯う云はれると大層いやがりますの。



クレエヴン。パラモアはどこだ。

カスパアソン。新聞を讀んでる。行かないかと誘つたけれど耳にも這入らないのさ。驚いたね、科學的な事には夢中になるんだから。賢い男だ。素的に賢い男だ。クレエヴン。(直くむかつとして)そうだよ。無論そうだがね。食事の作法としちや感心しない。時には店も閉めなかつちや。全く、あの男の學問で死刑の宣告を受けてからは、心配になるものだから、一刻だつてわしはその學問の事を忘れはしないのだ。(悲觀した様子で腰を掛く)

カスパアソン。(同情して)そのことは考へちやいけないよ。

恐らくはあの男が間違へたんだ。(深い吐息をして腰を掛く)だが兎に角非常に利巧な奴だ。實行する迄に二度考へて居る。(沈黙して暗膽たる思を胸に抱きつゝ、三人は坐つて居る。突然パラモアが醫事新聞を掴むやうに持ち、眞着な顔して取り亂したまゝ入つて来る。皆驚いて立上る。パラモアは話さうとするが喉がつかへて語が出ない。よろよろとする。カスパアソンは自分の椅子を執つて後に置いてやる。パラモアが其椅子に身を落すと皆集つて来る。クレエヴンは右肩、カスパアソンは左肩、ジュリアはクレエヴンの背



後に)

クレエヴン。どうしたんだ。パラモア。

ジュリア。御病氣。

カスパアソン。悪い知らせでなければ好いが。

パラモア。(失望の體)悪い知らせ。恐ろしい猛烈な凶報です。私の病氣が——

クレエヴン。(素早く)わしの病氣だね。

パラモア。(烈しく)いやわたしの病氣です——パラモア病——わたしの発見した病氣——わたしの一生の事業だ。御覽なさい。(醫事新聞を恐怖に堪えぬ様にて指さし

ながら)此れが本當なら、皆んな誤りだつた。そんな病氣はない事になる。(カスパアソンとジュリアとは此吉報を信じ兼て顔を見合す)

クレエヴン。(烈しく責める調子)それが悪い知らせだつて。

實際君は——

パラモア。(荒々しく遮ぎつて)あなたが自分の事だけ考へるのは御尤です。別に咎めはしません。病人は我儘なものです。私のこの感じの解るのはたゞ科學者だけです。(堪え難き不公平の念に悶えつゝ)これは恐ろしく感情的な我國の法律の罪だ。私は充分實驗をやる



理には行かなかつた——たつた犬が三疋と猿が一疋。考へて御覽なさい。歐洲は私の商賣敵——私の説を否認しやうと云ふ連中で一杯なんです。フランス——文明共和國フランスには自由がある。あるフランス人は猿を二百疋實驗に供して私の學説を否認しやうとしました。も一人は三十六磅——三フランの犬三百疋——を犠牲にしてこの猿の實驗を覆さうとしました。も一人は駱駝の肝臓の溫度を零下六十度にして、この一實驗のために前二者を否認しました。そして最後に僕を打破したこの恐るべきイタリヤ人

が現はれたのです。彼は動物を買込む費用を政府から支出さるゝのみならず、イタリヤの最大病院を自由使用することが出来る。(絶望的決心をする)何あに、イタリヤ人なんかに凹まされるものか。私はイタリヤに行きます。も一度パラモア病を發見します。確かに存在して居るのだ。私は直覺して居る。肝臓を有する凡ての生物を實驗に供さなければならぬ場合立ち到つても關はない。屹度證明して見せます。(腕組をして皆の方に向けて激しく呼吸する)

クレエヴン。(傷はれたといふ念が萌す)ではパラモア、犬三



正と猿一疋に基いて責任を以て私に死刑の——さうだ、死刑の宣告を下したんだね。

バラモア。(クレエヴンの、事實に對する狭い個人的見方を非常に卑劣)さうです。それ以上は許可せられなかつたのです。

クレエヴン。實に困つたねえ。バラモア。私は友情を傷けたくない。然し實際私は非常に困つた。ね、一體君は自分がどんな事をしたか解つて居ますか。一年間私に酒と肉を禁じて——世間の物笑にして——あはれな菜食家、禁酒家にしてしまつた。

バラモア。(立上り)よろしい。それちやこれから埋合せをなさい。(苦々しげに新聞をクレエヴンに示し)そうら讀んで御覽なさい。駱駝はアルコオルに溶かした牛肉を食はしたけれど重量が増した相です。好きな丈飲んだり食つたりなさるが好い。(猶ほ支へが無くては立てないので、カスバアソンの側を通つて書架に行き、皆に背を向け、手の上に頭を載せて書架に寄り掛つた儘立つ)

クレエヴン。(不平を洩して)さうさ。君には理もなくそんな事が云へるだらう。だが私を副會頭にした人道協會や菜食協會などには何と云へる。



カスパアソン。(ふきだして)は、あ、あれをうまく利用したんだね。

クレエヴァン。(和かに)やむを得ないから氣持よく諦めたんだ。誰だつて悪くは云へまい。

ジュリア。(慰めて)まあまあ、好いわ、お父さま。食堂へ行つておいしい相なビステキを召し上れな。

クレエヴァン。(身震ひして)うふ。(悲しげに)いや、昔の剛健なビステキの趣味は無くなつた。私の性質は粥を食つて居るうちに墮落して了つた。(バラモアに)これが君の解剖實驗の結果だ。君が馬で以て實驗を初めたら、

無論結果は私に豆を食はせて要件に適するやうにするだらう。

バラモア。(體勢を更へず、簡単に)まあ、皆でかついで呉れるやうな事があつたのなら結構ぢやありませんか。

クレエヴァン。(怒めしげに)結構かも知れんが迷惑だ。君は人に一年の命しか無いと信じさせるのがどんなに眞面目な問題だかよく解つてはゐないのだ。本當だよ、バラモア。私は黙つちや居られない。必要もない遺言狀を造へた。到底普通の關係では濟まされない人間とも和睦した。永生するのなら決してそんなこと



はしない程娘たちを側へ引つけた。眞面目な思索に耽つたり讀書したり特別に教會へ行つたりいろいろなことをうんとやつた。それが唯だ時間の空費になつてしまつたぢやないか。實に不愉快の極だ。寧ろ自殺したいと云つた時に男らしく死んでしまつた方がすつと好かつた。

バラモア。(前の如く)これからやつても好いでせう。あなたの心臓は薄弱になつて居ますからね。それ丈ぢや充分だかどうだか知らないが。

クレエヴァン。(不機嫌に)バラモア、失禮だが、私はもう醫

者としての君の意見は信用しない。(バラモアは眼を輝かせ、身を起して聞く)君があゝの宣告をした時には診断料として随分確かな金を拂つたね。あれに相當する丈の事は仕て呉れなかつたぢやないか。

バラモア。(振り返り、嚴めしくクレエヴァンに對して)クレエヴァン大佐、それはどうだか解りますまい。金なら返します。

クレエヴァン。金の事ぢやないよ。兎に角自分の位置を了解して貰ひたいね。(バラモアは角々しく身を背ける。クレエヴァンは衝動的に後を追ひ、後悔したらしく云ふ)や、こん



な事を云ひ出したのは、どうも私が悪かった。(握手を求め)

パラモア。(自分を押へて手を握り)何あに、あなたが正當です。大佐。私の診断が悪かった。責は私が負はなければなりません。

クレエヴァン。(手を握つたまふ)いや、そう云ひ給ふな。自然の成行だからな。私の肝臓は難物だから誰だつて診断を誤る。(永く握手する。それがパラモアの神経に苛くこたへる。パラモアはイブセンの左手のレセツスに退き、殆んど咽び泣きして腰掛の上に身を投げ、臑を膝の上に、頭を手

の上に置いて醫事新聞の上にのし掛る)

カスパアソン。(室の他の端でジュリアと話して居たが)さあ、もうそれはそれで好い。兎に角おめでたう。永生して呉れたまへ。(クレエヴァン握手を求め)いや、まあ、娘さんから。(優しくジュリアの手を執り、クレエヴァンに渡す。ジュリアは一時に感情が込み上げて父に抱つく)

ジュリア。父さん。

クレエヴァン。お父さまの命が少し延びたので嬉しいかい。

ジュリア。(殆ど泣く様に)え、嬉しいわ。嬉しいわ。(カスパアソン、聲立て、咽び泣く。大佐も動かされる。シルヴァ



食堂から遣つて来て三人を見て突然戸口に止る。パラモアは  
レセツスだから彼女には見えない)

シルヴァア。まあ。

クレエヴン。話してやるが好い。ジュリア。私から話すの  
は少し變だ。(泣いて居るカスバアソンの所に行き、慰める  
様に肩を敲く)

ジュリア。まあ大變だよ、シリイ。父さんはもうちつと  
もご病氣ぢやないの。パラモアさんが間違へたの。  
父さん。(クレエヴンの左手を捕へ、こごんでそれにキスす  
る。クレエヴンの右手はなほカスバアソンの肩の上にある)

シルヴァア。(嘲けるやうに)知つて、よ。無論大食の故なん  
ですもの。あたしが常住云つてたちやありませんか。  
パラモアさんは馬鹿だつて。(激動、三人は當惑して振向く)  
パラモア。(悪心なげに)なあに、ミス、クレエヴン。今は  
歐羅巴中でそう云つてますよ。

シルヴァア。(少しく面映く)どうも失禮。パラモア先生。小  
娘の感じた事なんですから御免下さい。

クレエヴン。(傲然と)なあに、心配しなくとも好い。  
シルヴァア。父さん、何にもそんなに氣に掛けちゃ居ない  
ぢやありませんか。賭でもするわ。(クレエヴンの所に



来て)それにあたしは、あれがノンセンスだつて事は初めつから知つて居たのよ。(甘える様に)ねえ、父さん。あなたの命ばかりが外の人のと違つて、さきが極つてるなんて筈はないんですもの。(父は機嫌よく、娘の頬を突つく。ジュリアは辛抱しきれず、連中から離れる)喫煙室へ行きませう。一年の間禁酒して居た後でどんな事が出来るか見物ですわね。

クレエヴン。(戯談氣に)無作法な奴だ。(耳を掴む)行かうぢやないか。ジョオ。ごたごたの後で興奮劑を一つやるのも妙だせ。

カスパアソン。好からう。前にもよくやつた。氣持の好いものだ。(卓子の所に行き、イブセンの塑像に對し空拳を振る)君の眼や耳が利いたら、君もゆくわいだらうに。

クレエヴン。(驚いて)誰さ。

シルヴァア。え、無論、なつかしきヘンリックよ。

クレエヴン。(まごついて)ヘンリック。

カスパアソン。(辛抱しきれず)イブセンさ。君。イブセンだよ。(階段の方の戸口より出る。シルヴァア、通りすがりに塑像にキスを送り後に従ふ。クレエヴン茫然と娘の後を凝視し、次で塑像を視る。其問題は解けないものとして思ひ切つ



て、頭を左右にふり二人の後を追ふ。戸口で急に立留つて引返す）  
クレエヴン。（和かに）序だがパラモア。

パラモア。（努めて身をもたげ）は。

クレエヴン。私の心臓に就て云つた事は眞面目なのかい。

パラモア。

あ、何でもありませんよ。一寸した水泡音で

——多分僧帽辨が少し摩滅して居るのでせう。なあに、少し用心すれば一生大丈夫です。あまり吸つちやいけませんよ。

クレエヴン。えつ。また禁止か。實際君は。實際——

パラモア。（惱ましげに立上り）失敬ですが、もう御免を蒙り

たい。私は——

ジュリア。お父さま。好い加減になさいよ。

クレエヴン。よし、よし。（室の中央を不安げに歩みつゝあるパラモアに近づく）ね。パラモア君、わしは決して我儘ぢやない。君の失意には大に同情ができる。しかし男らしく堪えなければならぬ。兎に角、實際、近代科學にはうんと腐敗した個所があるといふ事を今度の事が示して居やしないか。内證の話だが、實に残酷だね。駱駝や猿を切開したり磔にしたりするのは醜怪の至だ。それは君も認めるだらう。早晚美的



情操を枯らしてしまふ。

バラモア。(振り向く)大佐。あなたがヴィクトリア勳章を頂戴したスウダンの役では一體駱駝や馬や人間がどれ程切り裂かれたんですね。

クレエヴン。(赫となる)それは堂々たる戦争だ。事が違ふ。バラモア。え、裸體の槍軍に對してマルチン銃や機關銃ですすからね。

クレエヴン。(熱して)いや私の戦つたのは、他の隊だ。命がけの仕事なんだからね。それを忘れて貰ふまい。バラモア。(同じく興奮する)私だつて、醫者仲間の常とし

て、兵卒以上に屢々命がけの仕事をしました。

クレエヴン。御尤も。それを考へるのを忘れて居た。失敬したよ。バラモア、職業に對する悪口はもう云ふまい。だが私の肝臓に就ては昔風の振興的療法——獵犬と共に錚々たる馳驅を試みると云ふ遣方で辛棒させて頂きたいね。

バラモア。(苦々しげに冷かす)その方が寧ろ残酷ぢやないでせうか。澤山の犬が一疋の狐を喰ひ裂くといふのは。ジュリア。(二人を宥めて)どうぞ、また議論を初めるのはお止しになつて下さい。お父さま、喫煙室へいらつ



しやいよ。カスバアソン様がどうしたかつて心配して居られますよ。

クレエヴァン。好いよ、好いよ、今行く。だがバラモア、君は今日どうかして居るね。堂々たる狩獵に對してそう云ふ――

ジュリア。しつしつ、(着めつゝ月口へ追遣る)

クレエヴァン。よし、よし、行くよ。(ジュリアに逐ひ出されて機嫌よく出て行く)

ジュリア。(月口で振り向き、出来る丈人を迷はすやうな態度で) そう、御落膽遊ばすなよ。バラモアさん。確乎なさ

いましたな。あなたは全く御親切な方ねえ。父に就てもまあ種々と有難う御座いました。

バラモア。(恐悦して走せよる) まあ、お優しい事を云つて下さる。

ジュリア。あたしは不幸な方はお氣の毒で見えてゐられないのでございますよ。不幸つて事は私には辛抱がしきれませんわ。(颯と馳せ出ながらふり向いて艶めかしい流腕を興へる。バラモアは有頂天になり、ガラス戸を通して、立ちながら後姿を凝視す。彼がかく放心の體で居る間にチアサリス食堂より入り来て腕に觸れる)



バラモア。(驚きて)え。どうしたんです。

チャアテリス。(勿體らしく)美しい女だ。ね。バラモア。(感心したらしく)バラモアを見て)どう云ふ風にして参らせちやつたんだい。

バラモア。私わたしが。あなたは實際じつさい—— (チャアテリスを眺めて、氣を落附かせ、冷淡に)失敬しつげいですがこれは戯談じやうだんにすべき問題もんだいぢやありません。(チャアテリスを離れ、室の側に沿ふて歩く、安樂椅子に腰を下して醫事新聞を讀みつゝ會話を續け度ないといふ意を示す)

チャアテリス。(知らぬ振をして、靜かに側の椅子に腰を掛く)な

せ結婚けつこんしないんだ。バラモア。君きみの職業しよくげふで獨身どくしんは見つともないよ。

バラモア。(なほ讀む振をして簡単に)それは私わたしの事ことですよ。あなたに關係くわんけいはない。

チャアテリス。そうでもないさ。大おほいに社會問題しゃくわいもんだいだ。君きみは結婚けつこんするつもりだらう。

バラモア。そんな事ことはお答こたへは出來できません。

チャアテリス。(驚いて)出來できない。そんな事ことを云いひ給たまふな。なせさ。

バラモア。(憤然として立上り禁談話のピラを敲く)失敬しつげいだが此